
ラッキースターユニバースOG

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラッキースターユニバースOG

【Nコード】

N01880

【作者名】

sibugaki

【あらすじ】

突如元居た世界から何と「らきすた」の世界に来てしまった「リュウセイ・ダテ」は、とりあえず再び学生生活を楽しむ事にした。そんなある日、陵桜学園の目玉「桜藤際」の準備で1年生が開く「ネット喫茶」の手伝いをしている時に、偶然持ってきたゲーム「ラッキースターユニバース」をプレイすると眩しい光がその場に居た一同を飲み込んでしまった。

気がつくと其処はゲームの世界

果たしてリュウセイは仲間の皆と無事に元の世界に帰れるのだろうか？

プロローグ（前書き）

これはP S 2用ソフト「らき すた〜陵桜学園桜藤際」にあるシナリオの一つ

「ラッキースターユニバース」を元にした小説です
どうぞご覧になって下さい

プロローグ

新西暦1997年

其処には2体のロボットが立っていた

連邦軍が開発した機体「Rシリーズ」と呼ばれる機体の集合体「SRX」

数多くの文明のデータを元に構築されたゼ・バルマリイ帝国の切り札「ズフィールド」

その2体のロボットが戦っていた

お互いに酷く損傷していたが、此処に来てSRXが勝負に出た

「ライ、アヤ！爆碎剣を使うぞ！」

茶色の髪をしたアジア系の少年が叫んだ

「何時でも良いぞ！リュウセイ！」

金髪の青年がそれを言い返す

計器を見るが、どう見ても後一発分しか無い

「リュウ！爆碎剣は後一回しか出せないわ！しっかりね！」

ダークグリーンの髪をした美しい女性がそう言った

それにリュウセイと呼ばれた少年は頷く

「外さねえよ！これで決めてやる！天上天下！念動爆・碎・剣！」

SRXの胸部から現れた光輝く剣を手に取りそれをズフィールドに突き刺す

「グゴオオオオオオオオオオオオ！」

ズフィルードは悲痛の叫びを上げる
それと同時に剣が柄から外れて行く
突き刺さった剣が凄まじい光を放つ

「念動爆砕！」

そう叫んだと同時に剣が大爆発を起こす
それによりズフィルードは粉々になってしまった

「やったぜえ！遂にズフィルードを倒したぞ！」

リュウセイは諸手を上げて喜ぶ
だが、

「待てリュウセイ！まだ反応があるぞ！」
「何！」

ライの言葉に驚いたリュウセイが目の前を見る
其処には既に顔だけになったズフィルードが再生を始めていた

「野朗！しぶとい奴だ！何か武器は残ってないか？」
「駄目だ！SRXの武器はもう何も残ってない！エネルギーも底を
ついでる」

「くそっ、打つ手なしかよ！」

リュウセイはダンと壁を叩く
その間もズフィルードは徐々に再生していた

リユウセイは歯噛みしてある決断をした

そして合体を解除し3機のR・マシンになった

「リュウ！一体何をするつもりなの！」

「R-1が動くだけのエネルギーはある！こうなったら俺の残ってる念を全て奴にぶつけてやる！」

「止せ！リュウセイ！」

「もうこれしか手はねえんだ！行くぞ！R-1！とおおおつげき
いいいいい！」

R-1は飛行形態R-ウィングに変形して猛然と再生中のズフィルドに突っ込んでいく

その周りを緑色の結界「念動フィールド」が覆う

[illegible]

リウセイの全ての念を込めた体当たりがズフィールドに命中すると凄まじい閃光を放ち、R - 1とズフィールドを飲み込んでいく。その光景を破損したR - 2とR - 3が見ていた。

「りゅ、リュウセイイイイイイイイイイイ！」

「リュウウウウウウウウウウウウウウウウウ！」

ライとアヤの叫びが漆黒の宇宙に響き渡っていた

*
*
*

西暦2000年 日本 埼玉県 春日部市 泉家

「むむう・・・やっぱスパロボは燃えるシチュエーションが多いねえ」

テレビを見ながら満足そうに顎を摩る少女が居た
青い長髪で右目の下に泣きホクロがあり、年の割りに背が小さい
泉家の1人娘の「泉 こなた」である

「こなた、今何見てるんだ？」

そんなこなたの元へ父「泉 そうじろう」が来た
年中寝巻きに羽織りを羽織った無精ひげを蓄えた父である

「ああ、「スーパーロボット大戦OG」だよ。バンプレが作ったオリジナルキャラで作ったアニメなんだけどさあ、これがまた燃えるんだよねえ！勿論萌えもあるんだけどさ」

「お！そりゃ楽しみだなあ！んで、今どの辺なんだ？」

「丁度終ってエンドロールが流れてるとこだよ」
「ガックシ」

それを聞いて激しく落胆するそうじろう
どうやら見たかったようだ

「そんなに気を落とす事無いじゃん！これDVDだし後で見せてあげるよ」

「うんうん、家の娘は優しいなあ・・・父さんは嬉しくてもう死んでも良いよお」

と云つて主室に抱きつこうとする父にこなたが蹴りを当てる

「調子に乗っちゃ駄目だよこの「犯罪者予備軍」」

「グハッ！ 酷い！ ・・・ まだ何もしていないのに！」

「その一言だとこの後何かしかすつもりみたいに聞こえるよお父さん」

こなたとそうじろうが何時もと変わらぬ何気ない会話をしていた
すると、突如テレビが激しく光り出した

「あり？故障かなあ？」

「ええ！このテレビまだ買ってそんなに経ってないけどなあ？」

そう言うてテレビを見る

すると、テレビから白いスーツを着た少年が飛び出してきた

「うぎゃ ああああああああああああああああ
あああああああ！」

その光景に驚く二人

すると、むくりと少年は起き上がった

「う……あ、あれ？……此処は、何処だ？」

ヘルメットを被った少年が辺りをキョロキョロしだす

「き、君は一体誰だ？」

そうじろうは警戒しながら少年を指差す

「へ？だ、誰だあんたら！……ってか、此处「R-1」のコクピットじゃねえぞ！一体何処だ？」

「R-1？……もしかして……君、「リュウセイ・ダテ」なの？」

「え？何で俺の名前を知ってるんだ？お前」

「うぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

こなたは信じられないと言った顔で叫んだ

何と、目の前にはアニメのキャラクターである筈の「リュウセイ・ダテ」が居るのだから

「つまり……この世界では俺達の世界はアニメであって、俺は何かの原因でこの世界に着ちまったって言うのか……」

とりあえずリュウセイはヘルメットを外して事情を聞いた
それを聞いてリュウセイは腕を組んで考え込んだ

「ど、どったの？」

「いやあ、そうだとすると……俺この後どうしたら良いのかなあ
って思ってたさあ……ほら、俺この世界だと身寄り全くねえし……
これからどう生活すれば良いか正直悩んでてさあ」

リュウセイが頬を掻きながら言った
すると

「あの、リュウセイ君だったね、良かったら家の部屋が空いてるか
ら家に住むかい？」

「え！良いんですか？」

「ああ、君さえ良ければ構わないけど」

「とんでもない！有難う御座います！凄い助かりますよ！」

リュウセイは机に頭を擦り付けて会釈をしまくった
余程嬉しかったのだろう

「んで、此処が私の部屋ね」

早速住み込みが決まったのでリュウセイは何故があった自分の私服
に着替えてこなたの部屋に来ていた

一面アニメのポスターやキャラクターグッズなどが置いてあった
俗に言う「オタク」である

「へー、お前ってこう言うのが趣味なんだなあ」

「ムフフー、リュウセイさんもこう言う趣味じゃないの？」

「フツ、残念だが違うな、俺はオタクはオタクでも「ロボットオタ
ク」だぜ！」

拳を突き上げて宣言する

（そんな自信たっぷりと言う事かなあ？）

そんなリユウセイに少し引きながらこなたは思った

「だってカッコイイだろう！唸る鉄拳！緊迫の戦闘シーン！ピンチからの大逆転！くくくく、燃えるぜくくく！」

「なんの！燃えも大事だけど今の時代は萌えだよ！可愛いキャラを如何に落とすか試行錯誤する時の快感・・・溜まらんっす！」

「ええっと・・・悪い、俺そう言うのってあんま詳しくねえんだよな（汗）」

流石のリユウセイも詳しくない物があつたらしく苦笑いを浮かべる

「あ、そうだ！今ギャルゲーをやってたんだっけ！」

こなたはハツと思い出してテレビを点ける
すると画面一杯に頬を赤く染める少女の絵が映し出された

『べ、別にあんたが好きなんじゃないんだからね！』

と、如何にもな台詞を吐く

「ムフフ、ツンデレは溜まらんですな」

「そうか？俺はあんまりこう言うのってやんねえから分かんねえけど」

「な、何と！リユウセイさん！その年でそれは不味いよ！良い年して異性に興味を持たないなんて！」

「そうか？後どうでも良いけどよお、別に俺の事「さん」付けじゃ

なくて良いぜ。何なら「リュウ」って呼んでくれよ」

「そう、んじゃリュウって対戦ゲームとかやる？」

「お！俺それ得意だぜ！特に対戦格闘ゲームじゃかなり自信あるぜ」

リュウセイは自信有り気に言う

それを見たこなたはニヤリとする

「ほほう、それは私に対する挑戦だねえ？この私の前でそんな台詞を吐くとは・・・後悔させてくれるわ！」

と言ってこなたは格ゲーの代表作「ス○リ○ト○ア○タ○」を取り出した

「お！ス○リ○ト○ア○タ○じゃん！こつちの世界でもあるんだな！よっしゃあ！やってやるぜ！」

「フハハ！返り討ちにしてくれるわ！」

二人がコントローラーを握る

画面には二人の操るキャラクターが激しい戦いを演じていた
普段なら余裕の顔をしているこなたも今回は険しい顔をしていた
それはリュウセイも同じであった

「ぬおっ！ここでコンボを繰り出すとはやるねえ！」

「なにいつ！俺の必殺コンボをかわすとは、やるなあお前！」

勝負は五分と五分のデッドヒートとなっていた
だが、

「此処で終りだ！超必殺ウウウ！爆裂拳！」

その場の空気に合わせてリュウセイが技名を叫ぶ
それに合わせてリュウセイの操っていたキャラクターがこなたの操
るキャラクターを倒した

そして画面一杯に「KO」の文字が刻まれる

「何とおおおおおおおお！この私が格ゲーで負けるとは・
・不覚！」

「フツ、俺に挑んだ不幸を呪え・・何つつてな！」

「むむう・・もう一回勝負だよりユウ！」

「おう！何度でも来やがれ！」

結局、その後およそ20戦は繰り返す二人であった

翌日

此处はこなた達の通う学校「陵桜学園」である

「うゝゝつす、今日は転校生が来たから紹介するでえ」

担任の「黒井 ななこ」が元気良く言う

すると扉が開かれて、其処から学生服を着たリュウセイが現れる

黒板に漢字で自分の名前を書き、皆の方を向く

「今日からこのクラスの生徒になった「伊達 隆盛」です！宜しく
！」

元気良くリュウセイは挨拶した

それにクラスの皆の歓声が出迎える

とりあえず今は元の世界に帰る方法も大事だが、今はこの世界を楽し
むのも悪くないな

そつりゅうせいは思うのであった

プロローグ（後書き）

次回は多分異世界に向かわせます

第1話 転移

リュウセイが陵桜学園に来てから実に数ヶ月が経過していた
その間リュウセイはこなたの友人達や後輩達と面識を深め合い、そ
れなりに楽しい学園生活を送っていた

だが、本心では帰らなくて良いのかと言う思いもあるにはあった
しかし帰る方法が無い以上慌てても仕方ないので今はのんびりして
いる事にした

と、言うのもズフィールドは倒したのもう戦いは終わったような物
なのだ

とりあえずの心配は無くなったと言える

そして、今陵桜学園は一つの山場を迎えていた

それが今回の目玉「桜藤際」である

と言っても内容は他の学校で言う「文化祭」なのだが、此処陵桜学
園は総生徒数が何と4桁は行く程のマンモス校なのだ
その為この桜桃際もかなり凄い事になる

リュウセイも勿論その桜藤際の手伝いをしていた

「それじゃ、リュウセイさんは小道具係をお願いしますね」

「おう！任せておけ！」

桜色の髪をした生徒「高良 みゆき」の言葉にリュウセイは元気良
く返事する

「頑張ろうね、リュウセイ君！」

「ああ、目一杯盛り上げてやろうぜ！」

紫のショートカットで頭にリボンを巻いた生徒「柊 つかさ」が激
励してくれた

「でも大丈夫なの？あなたこなたと同じで何処か抜けてるところあるし……心配だわ」

「なっ！酷い事言っなあかがみ」

同じ紫色の髪を両端に束ねた髪型をした生徒「柊 かがみ」のキツイ言葉にリュウセイは参ったと言いたげな顔をする

「ま、家のクラスは演劇をやるからしつかり台詞を覚えないとね！」

「確か、お姉ちゃんのクラスと合同なんだよね」

「そうよ、だからしつかりやらないとね」

そう、リュウセイのクラスとかがみのクラスは合同で演劇をやるのだ
題目は……確か「Fate」って言っていた筈だ

台本を読ませて貰ったが、とても分厚かった

正直あんな台詞を全部覚えるのかと思うと頭が痛くなる

確か訓練教本もあんな位分厚かった気がする

リュウセイの脳裏に記憶が蘇る

それは、3日貫徹で訓練教本を暗記していた時であった

趣味の時間も睡眠の時間すらも削って勉強に専念していた時であった
今となってはいい思い出だが、あの時は正直かなり辛かった

何せ趣味が出来なかったのだから

「ま、それに比べちゃ気楽なもんか……」

そう言っつてリュウセイは軽く笑う

すると、教室の扉を開けて誰かが入って来た

桜色に弱冠赤みが入ったような色をした短い髪を両端で束ねた髪型をしたこれまた背の小さな生徒である

「お姉ちゃん！居る？」

「おやあ？どつたのゆうちゃん！」

こなたが呼ぶ

彼女はリュウセイと同じく泉家に住んでるこなたの従兄弟の「小早川 ゆたか」である

因みにゆたかが来たのはリュウセイが来た翌日であった

最初ゆたかがリュウセイを見た時は見知らぬ人が居たので度肝を抜かれたらしいが、今では頼れる兄貴分として慕っている

「ちょっとお姉ちゃんの力を借りたくて・・・」

「こいつの事？・・・それって何、ゲーム？それともアニメ？言っとくけどあっち系のは駄目だからね！」

かがみがキツイ顔でこなたに言う

因みに「あっち系」と言うのはリュウセイ自身も余り良く知らないこなたに聞いたが、詳しくは教えてくれず只「子供がやってはいけないゲームだよ」とだけ言っていた

一体どんなゲームなんだ？

「で、一体何の用なんだ？ゆたか」

「パソコンの事なんだ・・・私良く分からないから、お姉ちゃんなら分かるかなって思ってたね」

リュウセイの問いにゆたかが答える

確かに、パソコンならこなたは得意だろう

現に色々な事やってるし

横目でこなたを見ると当然だがこなたは自信有り気な顔をしていた

「まっかせっなさーい！パソコンならこの私がばーんと解決しちゃ

「うよお！」

親指を立てて如何にも大風呂敷を広げるこなた
それを聞いてゆたかの顔が明るくなる

すると、開いた扉から更に3人の生徒が入ってきた

1人はグリーンのショートカットに青い瞳をした少し暗そうな感じ
の生徒

もう1人は黒い長髪に丸眼鏡を掛けた生徒で

最後は金髪で何処か間違った英語を使っている生徒である

「ゆたか・・・どうだった？」

「うん！お姉ちゃん手伝ってくれるって！」

「いやあ、助かったツス！」

「ベリー感謝デエス！」

後から入ってきた生徒達は皆嬉しそうな顔をしていた

えっと、確かこいつらは・・・ゆたかのクラスメイトの「岩崎 み
なみ」と「田村 ひより」と「パトリシア・マーティン」って言っ
てたな

みなみはとにかく口数が少ないのだ

まるで何処かのアニメで「私が死んでも変わりが居るから」と言う
キャラクターに酷似してそうな感じがしてならないのは俺だけだろ
うか？

んで、ひよりとパティは何故か俺の事を付回すんだよなあ（汗）

その度に理由を聞くと「黙って私達の生贄になって欲しいツス！」
って言うて理由を教えてくれないんだよなあ

訳を言えば手伝ってやるのに・・・変な奴等だ

そんな彼女等がこなたと話している

「なあ、俺も手伝って良いか？」

「おお！リュウも手伝ってくれるの？」

「任せろ！それでも結構パソコンは得意な方だぜ」

リュウセイは胸をドンと叩いて言う

「おお！流石は伊達先輩！頼りになるッス！」

「男ノ中ノ男デース！男魂デース！」

「お、おいおい・・・そんなに褒めるなよ・・・照れるじゃねえか」

リュウセイは満更でも無いような顔で頭を掻く

「調子に乗るな！」

するとそんなリュウセイに後ろからかがみの鉄拳制裁が下される

「イデッ！」

突然の痛みに思わず頭を抑えて蹲つづくまる

「まったく、殴る事はねえだろう？お前の拳骨って結構痛いんだぞ！」

「うつさい！一々調子に乗るあんたが悪いんでしょうが！」

涙目で訴えるもかがみは全く取り合おうとはしない

それどころかちつとも悪びれた様子すらない

フンと鼻を鳴らしていた

まあ確かに調子に乗った自分も悪いと言えば悪いのだが・・・だからと言って拳骨は無いのでは？

そう思っていた

「ゆたかちゃん、私も見に行つて良い？」

そんなリュウセイに対する鉄拳制裁を加えた後、ゆたかに自分も行きたいと催促する

当然ゆたかに断る気など無いので即効でOKを貰った

「あ、それだったら私も見たい！ゆたかちゃん、良いかな？」

「私もご同行して宜しいでしょうか？少し興味があるものでして」

「良いですよ。先輩達もいらして下さい」

つかさとみゆきの提案にゆたかはまた即OKを出した

「よっしゃあ！んじゃ早速パソコン室へ行こうぜ！」

「ぬおっ！私の台詞を取られた！やるなあ、リュウ！」

「フ、俺を出し抜こうなんざ100年早いぜ」

「良いからさっさと行くわよあんたら」

「へーい」

と、言う訳でリュウセイ達はゆたかに付いて行きパソコン室へ向かった

因みに道中でパティとひよりは何か大事な用事があるらしく別の方へ向かって行った

まあ忙しいのなしょうがないか

そう思っでリュウセイは深く詮索しなかった

「うへえ、こりや凄い数のパソコンがあるなあ」

パソコン室に辿り着いたリュウセイ達の目の前には多種多様なパソコンが置かれていた

それこそかなり古いタイプから最新式の「ヴ〇ス〇」等が置かれていた

「クラスの皆が自分のパソコンを持ち寄って来たの」

「それが・・・動けなくなっちゃって」

どうやら不具合があるらしくそれでこなた達に助けを求めたようだ

「とりあえず起動してみるか」

「そだね」

こなたとリュウセイは近くにあったパソコンを起動させる
起動は普通であった

「後は・・・あり？サイトには行かねえなあ？」

「ホントだ！こっちも行かないや」

どうやら起動はするがネットへは行けないようだ

「お姉ちゃん？分かる？」

「うーん、一体どうしてだろう」

こなたは難しい顔をしてパソコンを睨んでいた

「なあ・・・これって・・・もしかして設定弄くってないんじゃないのか？」

「え？設定？」

ゆたかが首を傾げる

「ああ、学校のプロバイダと接続しないとパソコンって使えないんだぜ」

「おおー！流石リュウ！いち早く気づくとは！」

「へへ、伊達にパソコン弄くってないぜい！」

得意げに親指を立てる

とりあえず各パソコンを調べて見た

結果は散々な物であった

皆とりあえず自宅にあるのを持ち寄ったらしく設定どころか中にはネットに繋げない程古い代物まであった為とんでもない事になっていた

「これ・・・今日中に終わるかなあ・・・（涙）」

「俺・・・今日見たいアニメがあつたのに（涙）」

オタクコンビ（こなたとリュウセイ）は涙した
そんな二人にかがみの鉄拳制裁が下される

「ウダウダ言つてないでさっさと終らせるわよ！」

「そ、そうだな！さっさと終らせて帰ってアニメ見るぞ！」

「うっしやあ！やつたるぜい！」

こなたとリュウセイは腕を巻くって作業に入る

基本はこなたとリュウセイの作業であった

それで使えないパソコンは残ったメンバーに電源を切って貰う事で
使えるか使えないかを判別する作業であった

「なあ、あと何台あるんだ？」

「うゝん、これでやつと半分ってとこかなあ？」

「うげえ、まだそんなにあるのかよ！」

リュウセイは驚愕した

結局、作業は難航してしまい・・・終わった頃にはすっかり日が暮れてしまい夜になってしまった

「うへへ、終った」

リュウセイが大の字になって寝そべる

その横でこなたが何故かパソコンを弄くっていた

「あん？こなた・・・何やってんだ？」

「モチツ！テストだよ」

「テスト？」

「って、あんた何ネットゲ持ってきてんのよ！」

かがみの言葉を聞いてリュウセイはパソコンを見る

「うおっ！これってあの「ラッキースターユニバース」略して「LSU」じゃねえか！」

「え？リュウセイ君も知ってるの？」

つかさの問いにリュウセイが頷く

「最近出たばかりの新品ホヤホヤじゃねえか！こなた予約したのか！」

「モチツ！其処んとは抜け目無いよお私」

「くく！俺も欲しかったあああああああ！」

リュウセイが本当に悔しそうな顔をする
それを見て溜息を吐く一同（こなた以外）

「ねえ、お姉ちゃん・・・そろそろ帰ろうよお」

「うん、もうちょっとだけやらせて」

「なあなあ、俺のも作ってくれよ！」

「リュウのも？うんそうだなあ・・・んじゃリュウは拳闘家タイプってのはどう？」

「お！良いねえ！カッコイイし！」

リュウセイは大喜びであった

「んで、私がシーフで、かがみんなが魔道士、つかさが僧侶で、みゆきさんが戦士で、ゆうちゃんがヒーラーで、みなみちゃんが狩人なんてどお？」

「へえ、結構ジョブが多いんだなあ」

何時の間にかのめりこんでしまった二人

「ちょっとあんた達、早く帰らないとお父さんとか心配するわよ」

「そうだよ、そろそろ帰らないと叔父さん心配するかも？」

皆が帰ろうと催促する

が、こなたとリュウセイは一度熱が入ってしまつとことんやるタイプの為中々引き下がない

「ほら、これがネットゲ仲間なんだよ」

「へへ、結構レア装備使ってんじゃない！」

等と話していると

カッ！

突如パソコンが閃光を放った

「うおっ眩しっ！」

「ネタかよ！って、俺も眩しい！何じゃこりゃ！」

「な、何？何も見えない！」

「お、お姉ちゃん！何処〜」

「み、皆さん！何処に行っただんですか〜」

「み、みなみちゃん！」

「・・・ゆ、ゆたか！」

パソコン室に居た6人を謎の閃光が包み込む

「こ・・・この感じは・・・まさか！」

そう、リュウセイは以前に感じた感覚であつた

それは自分がズフィールドにトドメを刺す際に突撃した時の感覚であつた

それと今回のコレは全く酷似しているのだ

「まさか・・・俺の世界に飛ばされるのか？」

そんな一抹の不安を胸にリュウセイの意識は徐々に薄れていった

「う．．．い、いてて．．．此処．．．は？」

目を覚ますと、一面森であつた

それも、日本には生えていないような見た事の無い木ばかりであつた
一体何故こんな所に居るのか

そもそも此処は何処なのだ？

不安を胸にリュウセイは立ち上がる

すると、自分の服を見てリュウセイは驚いた

「な、これって．．．」

今リュウセイが身に着けているのは学生服では無く、薄手の半袖シ
ヤツと長いズボンであつた

これは間違いなく「拳闘家」の服装であつた

「って事は．．．此処ってまさかゲームの世界なのか？」

自分の身に着けている服装を見ていの一番にそう思った
だとすると他の皆は一体何処に行ったのか？

「とりあえず辺りを探って見るか」

このままじつとしてても光明が見えてくるとは限らない
そう思ったリュウセイは森の中を散策した
誰かに出会う事を信じて

第1話 転移（後書き）

次回は多分戦闘します

第2話 戦闘（前書き）

リュウセイさん大活躍！

第2話 戦闘

辺りは薄暗い森であつた

空を見ると明るい空があつたので時刻は昼位だと予想は出来たが、それでも目の前の森は異様に薄暗い

幸いそれほど視界が悪くなるという事は無くかなり先は見えた
だが、急がないと夜になれば夜の森は危険がつきまとう物だ

特に夜行性の動物は危険な種類が多い

一刻も早く皆を見つければ
つと言つより

「此処つて・・・何処だ？」

歩きながらリュウセイ・ダテの脳裏に一抹の不安が過ぎつた

もしかしたら、此処は日本じゃないのかもしれない

何故なら目の前で生えている木は日本には見慣れない種類が多いからだ

と言つよりリュウセイ自身初めて見る種類が殆どだ

それにこんな樹海である

富士の樹海じゃあるまいし一体何処なのだろうか

そして今のリュウセイの姿である

これは明らかに先ほどこなたとやっていた「ラッキースターユニバース」で自分が設定したジョブの服装である

それがありますこの世界がゲームの世界なのだと確信を持たせた
そう思いながら歩いていると、目の前がパツと明るくなった

日の光が挿したのだ

どうやらこの辺りにだけは強く日の光が当たるらしい

そしてその一帯にポツンと横たわる何かを発見した

それは遠めからでも人だと思えた

緑の草が生い茂っている中でその姿だけが目立っただ

「人が倒れてる！」

リュウセイは急いで倒れていた人の下へ向かった

紫色の髪を両端に束ねたツインテールの髪型をしており、目を瞑っても目つきは多少キツめだと言うのが伺えた

それはリュウセイの知っている人物であった

「かがみ！大丈夫か？」

リュウセイは急いでかがみの元へ向かう

その時、森の中から何かが飛び出してきた

「何だ！」

飛び出した物体を見た

白い甲羅を纏い兜虫のような立派な角を生やした人の半分位ある大きさの虫である

だが、その姿を見てリュウセイの脳裏にある敵が思い浮かばれる

「ありや！バグズじゃねえか！何でこの世界に居るんだ？」

リュウセイは驚いた

バグズ・・・またはメギロッドは本来はリュウセイの居る世界で襲い掛かってきた敵の偵察型ロボットなのだ

それが何故こちらの世界に・・・それもゲームの世界に居るのだからか

疑問に思った

そうしていると、更に数体のバグズが現れる

現れたバグズは一斉に倒れていたかがみに近寄り、それを見たリュウセイは行動を起こした

「この野郎！俺の仲間に出すってんなら俺が相手になってやる！」

リュウセイは飛び上がってかがみの前に降り立つ

自己流の構えを取りバグズを迎え撃つ準備を整える

バグズも突然の乱入者に驚くもすぐさま目標をかがみからリュウセイに変える

そしてギチギチと牙を震わせて威嚇をする

だが、それで怯むリュウセイでは無い

「来い虫野郎！このリュウセイ・ダテが相手になってやる！」

リュウセイが拳を突き上げてバグズ達に向かって叫ぶ

リュウセイから放たれる気迫にバグズ達は一瞬怯むもすぐに目の前の1体が飛び掛ってきた

鋭い牙を震わせてリュウセイに向かってくる

咄嗟にリュウセイはバグズの立派な角を両手で掴む

そのままジリジリと押し合いに発展した

「く・・・そう・・・何て馬鹿力なんだ・・・こいつ・・・」

歯を食いしばってリュウセイは踏ん張った

足元の地面が徐々に決けて行き、足が埋まってい

く反対にバグズは徐々に押し合っている

このまま押し合いをしているはずれ押し負ける

「だったらこれはどうだ！」

リュウセイはそう言ってヒラリとバグズの正面から横に飛びのいた突然前方に掛けていた力が消えたのでバグズはバランスを崩し前足で必死にバランスをとろうとしていた

「貰ったあ！」

その隙を付いてバグズの弱い横腹に正拳突きを当てる

柔らかい腹に衝撃を受けたバグズは苦しみの奇声を上げてその場に倒れた

そして数秒痙攣した後動かなくなる

それに驚くバグズであったが、すぐに体制を建て直しリュウセイに群がる

「オラオラオラ！ちんたらしてんのは性に合わねえんだ！ガンガン行かせて貰うぜ！」

長引かせたらこちらが不利になる

そう読んだリュウセイは一気に勝負に出た

まず目の前に居た一体のバグズの角を脇で抱え込むように抑えてそのまま梃子の原理で地面に突き刺した

兜虫の角を地面に突き刺したのを想像して貰いたい

そんな感じである

そのまま必死に地面に戻ろうと足をバタバタさせている

「よし！次」

そんなバグズには目も暮れず次の標的に移る

今度はすぐ隣に居たバグズに回し蹴りを当てる

固い甲羅には蹴りは大した威力にはならなかっただろうが、その反

動で体を反転させる事は出来た

反転させられたバグズはまるで逆さにされた亀のように足をバタバタさせていた

「ようし！トドメだ！」

決め技と言わんばかりにリュウセイは空高く飛び上がり太陽を背に受ける

そして片足を真っ直ぐ突き出して

某仮面ヒーロー張りのポーズで落下する

「受ける！必殺ううう！流星キイイイイイイイイイイイック！
！」

声高らかに必殺技を叫びながら流星は真っ直ぐ仰向けに倒れたバグズの腹に向かって蹴り落ちた

それを食らったバグズの腹はバラバラに砕け散り、中から機械の部品とオイルが飛び散る

そしてそのまま霧のように消えてしまった

「そうか・・・此処はゲームの世界だから倒したら消えるのがお約束なんだな」

手を叩いて現状に納得するリュウセイ

そんな時、角を大地に刺して置いたバグズが角を抜き起き上がる
すると口を開き其処からリング状のビームを吐き出した

「うおわっ！」

異様な気配に気づき振り返ったリュウセイは自分に飛んでくるビー

ムに気づき横に飛び退く

それを見たバグズはすぐさま倒れていたかがみの元へ駆け寄る
恐らくそっちの方が仕留め易いと判断したのだろう

「野朗！」

すぐに追いかけるもこのままでは僅差で間に合わない

何か遠くに当てられる武器は無いか

そう思つて懷を探ると、ある物を見つけた

取り出して見ると、それは1丁の大型拳銃であつた

しかも、それはリュウセイ自身見覚えがあつた

「これは・・・G・リボルヴァー・・・何で俺の懷に？・・・いや、
今はそんな事どうでも良い・・・弾は入つてる・・・なら！」

リュウセイはG・リボルヴァーの安全装置セイフティを外しバグズに向けて構
える

そして

「ジャイアント・リボルヴァアアアア！」

腹の底から叫びながらトリガーを引く

砲身から鉛の弾丸が飛び出しそれは真つ直ぐメギロード目掛けて飛
び、その甲羅をいとも容易く撃ち抜いた

撃ち抜かれたバグズはその場に倒れる

そしてこれまた霧のように消えてしまった

「ふう・・・どうやら片付いたみたいだな」

周りに敵が居なくなつたのを確認してリュウセイはかがみの元へ駆け

け寄る

「かがみ！おい、かがみ！起きろ！！」

「う・・・うん・・・こ、此処は？」

目を覚ましたかがみは今居る場所、そして自分が着ている服装を見て驚いていた

「ちょ、ちょっと！これってどういう事よ！何であたしがこんな格好してる訳？」

「そんなのこつちが聞きてえよ」

かがみの問いにリュウセイは肩を上げた
どうやらリュウセイ自身も知らないらしい
それを見てかがみはガクンとうな垂れる

「はぁ・・・何でこんなトコに居るのよ、思えば、あの時あんとこなたがゲームなんか始めなければこんな事にならなかったのに！」

「お・・・おいおい！俺のせいだったのかあ？」

「当然だろうが！」

かがみはジロリとリュウセイを睨む

それを見てリュウセイは困った顔になった

「んで、他に誰か居ないの？」

「ああ、まだお前しか見つけてない」

「あ・・・そう」

少し呆れ気味になったかがみはとりあえず周りを見回した

当たり一面木、木、木、木ばかりである

言ってしまうは深い森の中

そんな中にリュウセイとかがみは二人だけで居るのだ

「参ったなあ・・・他に誰か居ないのかあ？」

ボリボリと頭を掻いて辺りを見回すリュウセイ
すると

「あ！此処に居たんだ！」

「ん？今の声って・・・」

それは聞き覚えのある声であつた

そして、その声の主が森の影から出てきた

青い髪にチョンとてっぺんに出たアホ毛

そして右目の下に出来た泣きホクロ

んでもって年の割りに小さい背丈

「ねえ、何か最後の方酷い考え方してなかった？」

気のせいだ！

とにかく、彼女は皆が知つての通りこなたである

その後ろから続々と知つた顔が集まつて来た

とりあえず二人だけじゃ無かつた事にホッとするリュウセイとかが
みであつた

「えっと・・・今此処に居るメンバーで全員なんだな」

リュウセイは集まった皆を見てそう言った

今回りに居るのはこなた、かがみ、みゆき、みなみ、そしてリュウセイの5人である

・・・二人足りない

「えっと・・・ゆたかとかさの二人が居ないのか？」

「全く、よりによって一番手の掛かるのが居ないなんて・・・」

かがみはやれやれと頭を抱える

「むむう・・・流石かがみの妹、手の掛かるところまでそっくりとは」

「大きなお世話じゃ！それからかがみん言っな！」

冗談交じりに言うこなたに怒鳴るかがみ

それにこなたは「アハッ」と惚けた顔で言う

「それにしても・・・此処は何処なのでしょう？」

みゆきは頬に手を当てて呟く

「・・・それに・・・この服装は？」

みなみは今自分が身に着けている服を見て言った

皆最初にこなたが指定したジョブを現す服装になっている

こなたはじつとかがみを見る

「な、何よ？」

「いやぁ・・・かがみんを魔道士にして正解だったねえ・・・レオ
タードで生足チラリは反則だよぉ・・・眼福眼福♪」

こなたは両手を合わせて拝むようにかがみを見ていた
かがみは妙にくすぐったい思いになった

「ええい！止めんか！！そう言うあんただってヘソだしじゃない！」
「いやぁ、これはお約束って奴う！ホラ、シーフって軽装が多いじ
ゃん！」

「まぁ・・・確かにそうだけど」

そんなんで納得して良いのか？かがみ
と言いたい気持ちをぐっと抑える作者
そんな作者の気持ちなど露とも知らずこなたはリュウセイを見る

「でもリュウはあれだね、頭に白い鉢巻を巻いてたら『あのキャラ
になるのにねえ』」

「ああ、全く惜しかったぜ・・・もし白い鉢巻があつたら『あのキ
ャラ』になれたのになぁ」

お互いそう言い合つてはぁと溜息を吐く
それを見てみゆきとみなみは首を傾げており、かがみは呆れていた

「また始まつたわ・・・オタクコンビのネタが」
「何言つてんの？かがみんだってオタクじゃん」

「あんたらと一緒にすんな！萌えオタとロボオタが！（怒）」

額に青筋を浮かべてかがみは否定する

それを見てこなたがぷっつと頬を膨らませる

「えっ、萌えの何処が悪いのさ？」

「そうだ！燃える男のロマン！スーパーロボットの何処が悪い！」

「黙れ！一辺あんたら鉄拳制裁を加えたらうか？」

そう言ってかがみがあつと拳に息を吐く

それを見た二人は途端に青ざめて

「すんませんでしたあああああああああ！」

と、スライディング土下座をする

どうやらリュウセイもかがみの鉄拳は食らいたくないみたいだ
そんな時、

グ〜

ふと、何処からか腹の虫が鳴った

それを聞いた一同が辺りをキョロキョロした

「誰の腹の虫だ？」

「私じゃないよ」

こなたを見たりリュウセイに手をヒラヒラさせるこなた
じゃあ一体誰が・・・

そう思っただけと見ると・・・案外近くに居た

「・・・・・・・・」

其処には顔を真っ赤にして腹を抑えるかがみが居た

「かがみ・・・お前腹減ってんの？」

「しょ、しょうがないじゃない！あ後は帰ってご飯食べるだけだったんだから！」

「いや、別に責めてる訳じゃねえけどよお（汗）」

何故かムキになるかがみにリュウセイは少し困った顔になって頬を掻く

確かにリュウセイも腹は減っていた

ゲームの世界なのに腹が減るって一体・・・

そう思ったがとにかく腹が減っては戦が出来んと言うことわざがある通り何とかしないと不味いな
そう思った時であった

「あのお・・・何かお困りですか？」

何処から現れたのか、赤みの掛かった長い髪をして目がねを掛けた女性がバスケット片手にやってきたのだ

「いえ・・・只少しお腹が空いてしましまして・・・／／／／」

「・・・何か・・・有りませんか？」

藁にも縋る思いでみゆきとみなみは尋ねる

「それは大変ですね・・・こんな物しか無いですけど宜しければどうぞ」

そう言つて女性はバスケットから林檎に良く似た物を差し出した

「お！悪いなあ・・・んじゃあ」

「チヨいまち！」

女性から林檎を貰おうとするリュウセイをこなたが止めた

「どうしたんだ？こなた」

「私経験あるんだけど・・・ああ言うアイテムの中には毒が入ったのもあるんだよ！んで、ユーザーの中にはわざと毒入りアイテムを出す性質の悪い人も居るんだよ」

「ろ・・・ロクな奴じゃないわねそいつ・・・」

かがみは冷や汗を流す

「だ、大丈夫ですよお！毒なんて入ってませんってばあ！」

女性は疑われたのが心外だったのだろう少し不機嫌になりながら言う

「ど・・・どうする？」

「このままだと・・・お腹が空きすぎてステータスに影響出ちゃうし・・・」

「またゲームネタかい！（怒」

再びゲームネタを披露するこなたにかがみがツツコミを入れる

「しゃあねえ、俺が食べてみるよ」

「え？大丈夫なんですか？リュウセイさん！」

「平気平気、それに毒を食らわば『井』までって言うだろ？」

リュウセイが得意げに言う
だが、

「リュウセイ・・・それを言うなら毒を食らわば」皿「までよ」
「あ、そっか！」

かがみの指摘にボンと手を叩く

だが、そんなのは置いといて早速女性から林檎を受け取ると主室に
齧る

シヤクシヤクと歯切れの良い音を立てて暫くして飲み込んだ
すると

「お・・・おおおおおおおおおおおおお！」

「ど、どったの！リュウ！」

「やっぱり！毒が入ってたの？」

「す、すぐに吐き出して下さい！」

「き・・・気を確認に持って下さい！」

リュウセイの反応に皆がオロオロしだす
だが、

「美味え！こりや美味しい林檎だぜえ！」

と絶賛した

それを聞いて一同（女性以外）が盛大にずっこけた

「あん？どうしたんだ？皆」

「あ・・・あんたねえ・・・もう少しまともに出来ないの？」

眉を引く付かせてかがみは言う

だが、毒が無いのなら安心したと言う感じに女性から次々と林檎を
貰い受け食べる一同

特にかがみの食いっぷりは見事であった

「お前良く食うなあ・・・相当腹減ってたんだなあ」

「うっさいわねえ・・・悪い？」

「だから別に悪いとか言つてねえだろう（汗）」

かがみの反応にたらりと汗を流すリュウセイ

すると女性はまた何かバスケットから取り出した

それは、何やら怪しい青いクスリであつた

「そう言えば皆さん冒険者なんですよね？」

「まあな・・・と言つても今始めたばかりだけど」

リュウセイが言う

すると女性の顔がパツと明るくなる

「でしたら是非コレを飲んで下さい！これを飲めばたちまちステータスアップ！すぐに強くなれますよ！」

「え？飲んだだけで強くなる？」

女性の言葉にかがみは眉を顰めた

他の一同も疑り深い顔で見ている

「あのお・・・それって体に影響とかは出るんですか？」

「全然無いですよ！飲めば一気にラスボスをあつと言う間に倒せる位のレベルになっちゃいますから」

「それって・・・いわゆる『チート』だよねえ」

「ああ、しかもそんな物を堂々と売るなんてよあ・・・」

女性から離れた所でリュウセイとこなたが耳打ちした
余程そのクスリが気に入らないらしい

するとかがみが近づく

「あんた達はそんなの使わないの？」

「当たり前じゃん！そんなの使ったらゲームが面白くないよ！」

「そうだそうだ！苦労してこそその先に真のエンディングがあるんだぞ！お偉いさんはそれが分からないんだ！コン畜生（涙）」

こなたは拳を握って答え、リュウセイは滝のように涙を流す
それを見てかがみが呆れる

「はいはい、分かったから五月蠅い熱弁は止めい、鬱陶しい」

手をヒラヒラさせてかがみは呟く

「今私の連れがこれを飲んで魔王を退治している所なんですよ！どうです？お二人さんも是非是非い」

結構しつこくクスリをみなみとみゆきに押し付けようとする女性
そんな女性に二人は少し困った顔になる

「と、言われましても・・・」

「・・・私達・・・持ち合わせが・・・」

二人はポケットをまさぐる
当然ゲームし立てのメンバーにお金などある筈が無くスカンピン状態である

「大丈夫！そんな時は・・・」

女性が何かを言おうとした時、突如草むらから何かが飛び出してきた

これまた青い髪をした背の小さな少女である
その少女は女性に近づいた

「お姉ちゃああああああん！」

「シャドウちゃん！どうしたの？一体・・・」

「クスリ・・・クスリが切れちゃったよおおお！また頂戴！」

「ええ！駄目よ！あれは売り物なんだからこれ以上使ったら肉食べられなくなっちゃうわよお」

「うう・・・で、でもお・・・」

ひかげと呼ばれた少女は涙目になる

それでも女性は厳しいらしく一向に首を縦に振らない
そんな時

「くおおおおおらあああああああ！其処に居たかあああ
あああああああ！」

「ヒツ！来ちゃったあ！」

大きな声がした
それを聞いたひかげの体がビクンと震える

「な、何だ？」

リュウセイ達も声のした方を見た
其処には黒いマントを羽織り、如何にも「魔王」と呼べる人が其処
には居たのだ

第2話 戦闘（後書き）

次回、魔王を相手にリュウセイの秘められた力が炸裂する！

第3話 覚醒（前書き）

今回はリユセイメインです！
らき すたファンの方々・・・すんません

第3話 覚醒

目の前に現れたのは黒を基調とした服に黒のマントをつけたこれまた如何にもラスボスを思わせる外見をした人であった

そして、その人が腕に抱いている少女は、赤と桃色を合わせた色の短い髪を両端でチョンと束ねた髪型をした背丈の小さな少女であった
「・・・ゆ、ゆたか！」

みなみが目を見開いて言う

そしてこなたは青ざめていた

「うぞお！何でこんなとこに魔王が居るのぉ！」

「ま、魔王？魔王って・・・ひょっとしてラスボスって奴なの？」
かがみの問いにこなたが頷く

「でも、何で小早川さんが魔王さんの元に居るのでしょうか？」

「ってか、あの魔王って・・・何処か黒井先生に似てねえか？」
リュウセイが思っていた疑問を投げかける

だが、こなたがかぶりを振る

「そんな訳ないじゃんリュウ！黒井先生はもっと凶悪な顔をしてるよ！」

「こなた・・・あんた後で黒井先生に鉄拳制裁を食らうかもよ」

何気に危険な発言をしたこなたにかがみが額に手を当てて言う

そんなこなた達を他所に魔王はゆたかをそつと側の木陰に降ろしてさつき出てきた青いショートヘアの小さな少女を睨む

「自分さつきはようも好き勝手してくれたなあ？覚悟は出来とつやろうなあ！」

と、腕をボキボキ鳴らしながら歩み寄る

「お、お姉ちゃん！どうしよう！」

「シャドウちゃん！落ち着いて・・・こんな時は・・・逃げるが勝ちよ！」

と言って180度回転して逃げようとする

「逃すかいボケエ！」

と叫んだ魔王が手から紫色の魔力弾を放つ

それは二人の間を飛びそれから少し離れた辺りに着弾して激しい爆発を起こす

爆風と轟音と砂煙が舞い散る

「うおお！」

「うひゃあ！」

「きゃあっ！」

「あわわ！」

リュウセイ達は咄嗟に目元を手で守った

視界を戻して着弾地点を見ると其処は深く抉れておりそれだけで威力が予想出来た

「うわ！何よあれ！」

「さ、流石ラスボス・・・威力が桁外れだよ」

「だからって此処で引退けるか！これでも食らえ！」

リュウセイは先ほどバグズを撃ち抜いたG・リボルヴァーで魔王を狙い撃つ

だが、

「甘いわあ！」

魔王のその一言と共に放たれた弾丸は魔王の片手でまるで木の葉でも払うかのように簡単に払われてしまった

それを見てリュウセイは驚きの顔になる

「何！弾丸を素手で払いやがった・・・流石は魔王って事かよ」

ちつと舌打ちしながら呟く

「不味いよりユウ！今の私達が全員が束になっても魔王には勝てないよ！」

「ま、マジ？」

かがみが不安の顔色をして聞く

「だって私達今始めたばかりなんだよ！言っちゃえば皆レベル1だよ！そんなのでラスボスなんか倒せる訳無いじゃん！」

「ですけど・・・このままゆたかさんやあの方達を見捨てる訳には行きませんよ！」

みゆきはそう言って視線の先で気を失っているゆたかやへたり込んでいる二人の少女達を見た

さっきの眼鏡の女性には腹が減った所で食料を分けて貰ったと言う恩義がある

その恩義を忘れて自分達だけ逃げるなんて到底出来ない

「俺が奴の注意を引くから、お前等はその内にゆたかとあの二人を安全な場所に連れてつてくれ！」

「って、あんたそんな事して大丈夫なの？」

「フツ、心配するなかがみ！何せ俺はこの小説の主人公だからな！間違っても死ぬ事はないさ」

親指を立ててリュウセイは自信有り氣に答える

だが、それとは逆にかがみは浮かない顔をしていた

「その自信は何処から来るんだ？」

と言いながらもとりあえずリュウセイ以外のメンバーは腰を抜かした二人とゆたかの救出に向かった

「コラア！その二人にはちと話があるんや！連れて行く言っんなら自分らでも容赦せえへんでえ！」

怒りの矛先をかがみ達に向けて魔力弾を放つ準備をする

だが、そんな魔王の頬を鉛弾が掠める

魔王は掠った頬を抑えながら振り返る

其処にはリュウセイがG・リボルヴァーを構えて立っていた

「お前の相手は俺だ！」

「ほう、ええ度胸しとるやないけ！ならうちを倒してみい！！」

「言われなくてもそうしてやるぜえ！」

リュウセイは飛び上がって拳を振り下ろした

だが、魔王はその拳を片手で掴むとポイと放り投げてしまった

「グハッ！」

投げられたリュウセイは巨木に背中を打ち付けて苦悶の表情を浮か

べる

「どうや！ちつとは力の差が分かったやろ！」

「な、なんのぉ・・・まだまだぁ！」

よろよると立ち上がり再び立ち向かうリュウセイ

今度は右の方向に回し蹴りを放つ

だが、これも片手で防がれてそのまま天と地を逆転させられて落下する

「ガハッ！」

一瞬何が起こったか理解するのに困った

だが、すぐに分かった

魔王がリュウセイの足を掴んでそのまま一回転させて地面に叩きつけたのだ

「ま、まだまだぁ！」

それでもリュウセイは立ち上がる

例え勝ち目の無い戦いだと分かってもリュウセイは決して敵に背は向けない

自分が背を向ければ、多くの人の目が涙に濡れる事になる

それは自分の居た世界でも同じであった

戦争・・・リュウセイが経験した悲しい記憶

その中で多くの出会いと別れ、愛と友情・・・そして、生と死があった

その中でリュウセイはガムシヤラに走ってきた

仲間と共に、地球を守る為・・・嫌嫌う、只生き残る為だ

戦争で負ければ先にあるのは只一つ・・・「死」だ

死ぬ訳にはいかない

俺にはまだ未来がある

こんな所で未来を終らせる気などない

だからリュウセイは立ち上がるのだ

何度でも、何度でも

「自分しつこいなぁ、いい加減諦めたらどうや？」

「冗談じゃねえや！こんなところで諦めたらあいつらに笑われちゃうぜ！」

リュウセイが言うあいつら

それはこなた達の事ではなかった

元の世界に残してきた信頼出来る仲間達

共に戦った戦友達

そいつらに言っているのだ

あの時の戦いに比べれば今の状況などお飯事ままごととして片付けられるだろう

それでもリュウセイは必死に戦う

今この世界に居る仲間達を守る為に

「うおおおおおおおおおおおお！」

盛大に気合を入れて猛然と殴りかかる

だが、それも魔王の片手で出した防御結界によって安易に阻まれてしまう

「ちっ！やっぱり通んねえか」

後方に飛びのいて地面に降り立つリュウセイ

そんなリュウセイを待ってましたとばかりに一気に距離を詰めた魔王のボディーブローが襲う

「グエッ！」

体がくの字に曲がる

相当な衝撃がリュウセイの腹に、内臓に襲い掛かる

一瞬異様な吐き気に襲われた

だが、踏みとどまった

両足で踏ん張り必死に上体を起こしている

顔が僅かに涙ぐんでいたが気にししてられない

軽く目に浮んだ涙を拭って再び構えた

「へえ、自分以外と頑丈やなあ・・・うちの攻撃を受けて立ってられたんは自分が始めてやでえ」

「へへ、お世辞でもそう言われると嬉しいねえ」

苦しさがあるがそれを感じさせないようにリュウセイは軽口を叩く
そしてチラリと後方に目をやった

後ろではこなた達が急ぎ足でゆたかや腰を抜かした二人を安全あ場
所に避難させている

後少しだけ時間を稼げば何とかなる

そう思った際に僅かだが隙が出来てしまったのだろう

魔王の猛然な蹴りを諸に食らってしまった

「グワッ！」

「うちを前にして余所見をはエ工度胸しとるやないけえ！」

蹴り飛ばされたリュウセイが巨木に背をぶつける

激しい衝撃が襲い掛かる

リュウセイの服は麻の布等で出来た所謂軽装なのだ

その為今の服は防具としての役割を一切果たさないでいる

地面に四つんばいになったリュウセイが数回むせりながら立ち上がる

足はフラフラでまともに立つ事さえ出来ない状態である

それでもリュウセイは意地でも立ち上がる

「惜しいなあ、自分度胸も根性もあるんに、只一つ・・・「力」が

足りひんわ」

「何！」

突然魔王が哀れみの目でリュウセイを見た

「それでもしもつと力があつたらうちを負かす事も出来たんやろう

けど、今の自分じゃ無理やな」

「な、そんなのやってみなけりや分からねえだろうが！」

「どんなに頑張ったって蟻が像に勝てるか？無理やろう！今の自分

がそれや」

「クッ、」

苦虫を噛むような形相で睨んだ

要するに自分は蟻で魔王は像だと言いたいのだ

悔しさが目一杯込み上げてきた

此処までの感情を抱いたのは何時以来だろうか

この世界に来てから戦争と言う概念から離れて以前の学生としての人生を謳歌してきたリュウセイにはとても久しく思えた

不思議と両の拳に力が込められる

歯をギリリとかみ締めて両足に力を入れて踏ん張って立ち上がる

体は既に魔王の攻撃でボロボロであった

もしかしたら骨に異常があるのかも知れない

だが、目だけは死んでなかった

それどころか、これ程までに痛めつけられたと言つのにその目は真つ赤な闘志で燃え上がっていたのだ

「リュウ！こっちは終つたよ！早くリュウも逃げないと！」

後ろでこなたが叫ぶ

どうやら自分が時間を稼いだお陰でどうにか安全な場所に避難出来たのだらう

だが、それでもリュウセイは引き下がらない

「悪いなこなた！俺はこいつと決着^{ケリ}をつけるまで逃げる気はねえよ！」

「何馬鹿な事言ってるよ！」

かがみの怒声が響き渡る

「あんたじゃ勝てないのは分かりきってる事じゃないの！大怪我する前に早く逃げなさいよ！」

かがみの言ってる事は正論であった

このまま戦っても勝ち目は恐らくないだらう

だが、そう分かりきってる事でもリュウセイは引き下がらない

「逃げて下さい！リュウセイさん！このままじゃリュウセイさんが・

・

「・・・ダテ先輩！」

みゆきとみなみが続けて叫ぶ

だが、それでもリュウセイは引き下がらないむしろ魔王に向かってゆつくりと歩み寄っていく

「此处で引き下がったら、俺はもう二度と前に進めなくなっちゃう・

・そんなのは絶対に嫌だ！だったら・・・どんな困難があっても、どんなデカイ壁があっても・・・俺は前に進んでやる！それが俺・・・

・「リュウセイ・ダテ」だあああああああ！」

大地に思い切り足を叩きつけてリュウセイが叫ぶ

その時、彼の体を稲妻が走った

（な、何だ！この感覚は・・・）

それは初めて感じる感覚では無かった

何処か懐かしい

そう、これは、初めて自分の中にある力に目覚めた時だ
戦争と言う世界から離れた世界で過ごしている内にその力は奥深く
に眠ってしまった

だが、今再びリュウセイの闘志に答えて力が蘇ってきたのだ
その力とは、

「念動力・・・また俺の中に念動力が蘇ってきたのか・・・」

自分の手を見てリュウセイが呟く

彼の手からは緑色に輝くオーラが立ち込めてきた
感じる

この力だ！

この力で俺は戦い、そして勝って来たんだ！

今までも・・・そして、これからも！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお！」

リュウセイは天に向かって咆哮した

その叫びは先ほどまでとは異なり、とても強く、とても頼もしく見
えた

「！！・・・何や、一体アイツに何があったんや？」

突然の変化に魔王も驚いていた

明らかに違う

今日の前に居る青年は先ほどまでよりも大きく、そして強く見えた
「な、何を驚いとるんや！相手はもう虫の息の筈や！一気に勝負を

つけたる！」

自分に言い聞かせるように言って魔王は両手を腰の下で翳した
するとその間を激しいスパークが起こり、徐々に丸い球体のエネルギー
ギーとなって現れたのだ

「あ、あれは不味いよ！リュウ！」

茂みに隠れていたこなたが叫ぶ

「どう言う事？こなた」

「あれは魔王の最大級の魔法だよ！あんなのレベル1の拳闘士が食
らったら一溜まりも無いよ！」

「嘘！」

かがみは驚いていた

そんなとんでもない技が今リュウセイに向かって放たれようとして
いるのだ

このままではリュウセイは大怪我をおってしまう

嫌・・・最悪・・・

「リュウ！すぐに逃げて！」

「リュウセイ！馬鹿やってないで早く逃げなさいよ！」

「お願いです！リュウセイさん！すぐに逃げて下さい！」

「危険です！ダテ先輩！」

4人が叫ぶ

だが、リュウセイは微動だにしない

それどころか両足を大地に打ち付けて構えている

「逃げる気は無いって事か？上等！なら食らええええええええええ
え！」

魔王が渾身の最強魔法を放つ

それは真っ直ぐにリュウセイに向かって飛んでいく

「俺を守れ！念動フィールド！」

リュウセイは叫んだ

すると、本来リュウセイに当たるはずだった巨大な魔力弾はリュウ
セイの面前で動きを止めてしまった

嫌、正確には何か見えない力に阻まれてしまったのだ

それは光り輝く壁であつた

その壁がリュウセイを脅威から守っているのだ

「おおおおおおおおおりゃああああああああ！」

そのままリュウセイは腕を横に振りぬいた

それに呼応したのか魔王の放った魔力弾は見当違いの方向に飛んで行き、そのまま爆発した

その光景に魔王はおろかこなた達が驚いていた

「な、何あれ？あんた知ってるんでしょ？」

かがみがこなたを揺さぶって聞く

だが、こなたもかぶりを降っていた

「あんなの分かんないよ！拳闘士にあんなスキルは無いし・・・」
言葉の途中でこなたはハツとした

もしかしたら、リュウセイの中に眠っていた力が目覚めたのかも知れない

もし、そうだとしたら、あの力はきつとリュウセイ自身の力なのだ
「今度はこつちから行くぜえええええええええええ！」

雄たけびを上げてリュウセイが突っ込んでくる

そして、馬鹿正直に再び拳を突き出してくる

「チツ！そないなもん！」

魔王は再び手を翳して防御魔法を展開させる

魔王の防御魔法とリュウセイの拳が激しくスパークする

明らかに以前とは力が違う

防御魔法を展開している魔王の顔が苦痛に歪む

想像以上の力なのだ

そして、そのまま魔王は吹き飛ばされた

だが、どうにか両足を地面に突き刺して耐える

そんな魔王にリュウセイは再び飛び上がった

今度は左の拳を力強く握る

握った拳から緑色のオーラが漂ってきた

「ま、またかいな！」

咄嗟に再び防御魔法を展開させた

今度は先ほどよりも分厚い壁である

だが、リュウセイは決して引き下らない

纏った拳をそのまま振り上げる

「唸れ鉄拳！ T - L I N K ナツ コオオオオオオオオオオオオ
オオウ！！」

腹の底から叫んでリュウセイが拳を突き出した

その拳は防御結界を突き破り、そのまま魔王に向かって行く

「くっ！」

咄嗟に魔王は両腕をクロスしてガードする

衝擊に備えたのだ

だが、何時になっても衝撃は来ない

疑問に思った魔王は視線を開ける

すると、其処には大地に大の字になって寝そべるリュウセイが居た

「だ……駄目だ……、もうへトへトで動けね……」

全身汗だくになってリュウセイが言った

どうやら先ほどの結界を破るだけで残りの力を使い切ってしまったのだらう

彼の胸は激しく上下しており息がとても荒い

「プツ、アハハハハハハハハ！」

それを見ていた魔王が声高らかに笑う

「レビュー」

すると、そんなリユウセイに向かってこなた達がやってくる

「よ、よう……お前等、無事か？」

「モチ！それよりリュウの方は大丈夫？」

こなたが心配そうに見る

そんな中、リュウセイは笑顔で言う

「ああ、ちつとばかり疲れちまつたが無事だぜ」

「ホント、あんたは無茶するわねえ」

かがみが呆れた顔で言う
すると

「魔王さん、大丈夫ですか？」

と言って魔王に近づくゆたかが居た
それを見て

「え？」

と、一同が声を揃えて目を見張るのであった

第3話 覚醒（後書き）

次回はどんなお話にしようか・・・

第4話 合流（前書き）

一ヶ月振りの更新です
遅くなって申し訳ないです

第4話 合流

一体どうなってるんだ？

一同がそう思った

目の前では魔王の事を気遣うゆたかの姿があった
何故ゆたかが魔王の事を気遣うのか？

そもそもゆたかは魔王に連れ去られて此処に来たのでは無いのか？
リュウセイ達は頭を捻る事になった
そうしていると、魔王がこちらにやってくる

「ホンマに悪かったなあ・・・うちどうやら頭に血が昇ったみたいなんや、怪我不いか？」

「あ・・・ああ・・・特に目立った怪我は無いぜ」

リュウセイは先ほどまでとは雰囲気がるで違う魔王に驚きながらも手を振ってそういう

それを見て魔王もホツとする

「ほんまかあ？ いやああんときはうちも正直やりすぎたなあと内心反省しとったとこやったんやあ」

「へえ、あんた見かけによらず結構良い奴なんだなあ」

どうやらこの人は悪い魔王じゃなさそうだ
そう思ったリュウセイはすぐさま魔王と打ち解けてしまった
まあ其処がリュウセイの凄い所なのだろう

「いやあ、流石はリュウだねえ、あの魔王ともう打ち解けるなんて」
「あんたが感心するとあんま凄いと思えないから不思議だわ（汗）」

こなたが感心する中かがみが突っ込みを入れた
それにこなたがふうと口を膨らませる

「それはそうと、何でゆたかが魔王と一緒に居たんだ？」

「実は、この世界に来てすぐに胸が苦しくなっただけどそんな時にこの魔王さんがくれた薬のお陰で楽になれたんだよ」

リュウセイの問いにゆたかが答える

それに皆が納得する

「そうだったんだ。うちのゆうちゃんがお世話になったね」

「ええねん、困った時はお互い様やろう」

手をヒラヒラさせて魔王が言う

それを見てこなたとリュウセイが「そうだよなあ」と言っただけで笑う

「それはそうと、どうしてラスボスである筈の魔王さんがこんな所に居るんですか？」

話を戻すようにかがみが聞く

それにリュウセイとこなたもおおと手を叩いた

流石オタクである

「そうだよ！何でラスボスの魔王がこんなところについてるんだよ！」

「そだよ、そもそも魔王って言ったら魔王城に居座ってて勇者を待つのが基本だよ！」

オタクコンビが指を指して魔王に言い寄った

「黙れオタクコンビ（怒）」

かがみの額に青筋が浮ぶ

どうやら鬱陶しかったようだ

まあこのオタクコンビのじゃれあいやかがみの対応は何時もの事なので今回は無視しておこう

そんな一向の視線を一齐に浴びていた魔王が話しを始める

「実はなあ、最近不正な行為をして強くなったプレイヤーが多いんや」

「不正な行為・・・ですか？」

みゆきが呟く

それを聞いてこなたの頭の電球に光が点く

「それって、チートだね」

「おいおい、そんな事して楽しいのかよ？俺にはチートなんてする奴の気持ちがかんねえなあ」

リュウセイが肩を上げて首を振っていた

それを見てかがみが以外そうな顔をした

「へえ、あんたらそう言う所は真面目なのね？」

「当たり前だよ！自力でやってこそゲームってのは面白いんだから！」

「そうだそうだ！むしろこっちだって迷惑してるんだからなあ！」

こなたとリュウセイは心外だと言いたげな顔で言った

「自分らは良いプレイヤーなんやなあ、せやけど、世の中そんな良

いプレーヤーだけやあらへんしなあ」

「ああ、其処に居た奴らの事みたいにか？」

そう言つてリュウセイがすぐ其処にいた二人を指差す

それに二人が「ギクウ」と肩を震わす

どうやら何か不味い事でもしたのだろう

そう思わせる素振りであつた

「なあ、あんたが持つてたあの薬つて一体何なんだ？」

「宜しければ教えて頂けませんか？」

余り怖がらせるのも可愛そうだと思いリュウセイとみゆきはやんわりと聞いた

すると先ほど林檎をくれた女性が口を開く

「ええと、この薬はあるお方から買つて、それを売つていたんです」

「もう三食塩粥生活からおさらばしたかつたんだよ、お肉食べたかつたのお！！！」

隣に居たシャドウと呼ばれていた少女が目涙を浮かべている

参つたなあ、どうにも女の涙にはリュウセイは弱い

こつも目に涙を浮かべられては強気で責められないのが事実である

「まあ、そのお何だ・・・もう泣くなよ・・・別に取つて食おうつて訳じゃねえんだしよ（汗）」

「・・・それに、さつき林檎くれましたし」

みなみもとりあえず落ち着かせようと彼女なりに考えた一言を言う
それを聞いて二人はどうやら落ち着いたようだ

「話を折るようで悪いが良いか？」

そんな一向を魔王が呼び止める

「そんでな、どうやら自分等をこの世界に呼んだのはうちじゃ無さそうなんや」

「どういう事だ？」

「もし自分らを呼んだのがうちならすぐにでも自分等を元の世界に帰せるんやけど、何かおかしいんや？さっきから帰そう帰そうやってるんやけど全く反応があらへんのや」

魔王が完全にお手上げの仕草をする

それを聞いてかがみの脳裏にある結論が浮かび上がる

「ね、ねえ・・・それって・・・何処かに黒幕が居るって事よねえ？」

「そうなりますね」

かがみの問いにみゆきが答える

しかしそれなら話しが早い

その黒幕なる物を倒せば自分達は元の世界に帰れるのだから

「で、でも・・・その黒幕さんの所には私達の売っていた薬でパワーアップした人達が居る筈ですよ？勝ち目あるんですか？」

「心配性やなあ自分は・・・さっきのうちとこいつの戦いを見とらんかったんか？レベル1でうちの結界を破る程なんやで？」

魔王はそう言つて顎でリュウセイを指した

それに皆も「ああ」と手を叩いて納得する

1人取り残されたリュウセイが回りをキョロキョロさせる

「凄いですね、ダテ先輩ってそんなに強かったんですね」

ゆたかが手を叩いて賞賛する

それを聞いて何処かくすぐったい思いがするリュウセイである

「にしても、さっきのあのリュウセイの能力は一体何なの？こなたも知らない能力みたいだったし」

「ああ、かがみん、あれはねえ・・・」

こなたがかがみに説明しようとした時

「こなた、ちょい待ち！」

「ん？何？リュウ」

こなたは突如呼び止められたので振り返った

するとリュウセイが手招きしていた

とりあえず其処に向かうこなた

するとリュウセイがそつと耳打ちする

（悪いけどよお、俺の元居た世界での話しはしないでくれるか？）

（良いけど、何で？）

（あんま皆に心配かけたくねえんでな）

（そっか、リュウは優しいね。良いよ、黙っててあげる）

ぐつと親指を立ててこなたは言った

その後、こなたは言葉巧みに操り、リュウセイの能力は拳闘士の隠し能力であると告げられた

「それで、この後何処に向かうかあてはあるの？」

「此処から東に行った所に内が住んどった城があるでえ」

「え？それじゃ何でこんな森の中に居たんですか？」

みゆきが聞く

すると魔王は思い顔をした

「不正行為をした奴らにフルボッコにされて追い出されたんや」

「うわぁ、悲惨だなぁ（汗）」

同情するリュウセイ

「それじゃ・・・其処に行けば良い訳ですね」

「ああ、もしかしたら俺達が元居た世界に戻る方法が見つかるかも知れないし、魔王さんの城を取り戻せるし一石二鳥だぜ」

と言ってグツと親指を立てるリュウセイ

「せやけどなぁ、城の周りにはうちが帰ってこれへんように見張りを置いとる筈なんや」

「見張りねえ・・・なぁ、あんたら」

リュウセイはふとさっきの二人の方を向く

それに二人は首を傾げる

もう怖がる素振りは無い

「警備の手薄な場所って分かるか？」

「あ、それなら分かりますよ・・・案内します？」

女性が言う

それを断る理由も無いので承諾する事になった

「そう言えばまだ自己紹介していませんでしたね。私は「サニー」と言いまして職業は「マーチャント」です」

「マーチャント？」

「要するに商人だよ。アイテム売買とかに特化した職業だな」

？マークを浮かべるかがみ達にリュウセイが説明する

「それで、こっちがシャドウちゃん、私の妹で魔法戦士をしているの」

「よ、宜しく」

と、言う訳でなんやかんやで一同は東にあると言つ魔王の居城を目指すのであった

果たしてつかさは無事なのだろうか？

そして、リュウセイとこなた達をこの世界に召還したのは一体何者なのだろうか？

それはまた何時か分かる事なので此処では話さない事しておく

第4話 合流（後書き）

次回はいよいよ魔王城に入る・・・かな？

第5話 強敵

魔王とゆたかと合流したりユウセイ達はサニーとシャドウの姉妹に連れられて黒幕の居ると言われる（元）魔王城を目指していた

「ところでよあ、三食塩粥って本当なのか？」

その間サニー達とはすっかり打ち解けていたリユウセイが聞いていたそれに妹のシャドウが苦い顔をしていたのを見た

どうやら本当のようだ

すると相当生活が苦しいのだろう

「まあ気持ちは分からんでも無いがなあ、そりゃ犯罪やでえ？」

流石の魔王も此処まで哀れだと怒る気にもならなかった

最初は消し炭にしてやろうかとさえ思っていたが事情が事情だけに同情してしまったのだ

本当に魔王なのかこいつは？

「失礼なやつちゃんあ、ちゃんと相手には正々堂々挑むつもりやでえ」

「あのお、誰に話してるんですか？魔王さん」

虚空の空に向かって叫ぶ魔王に対してみゆきがやんわりと問いかけるそれを聞いて咳払いしてこの場を誤魔化す

「と、とにかくや！あんたらが居ればうちの居城を取り返してくれるのは簡単やし、ホンマ頼むわ」

「おう！俺達にドンと任せておけ！」

リュウセイは自身の胸を叩いて自信有り気に言った
その姿は何処か頼り甲斐があった

「でも言うのがリュウセイじゃねえ」

だが、横でかがみがハアと肩を上げる

「な、酷え事言うなあかがみ！俺ってそんなに信用ないのか？」
「無い！！！」

リュウセイの問いに自信を持ってかがみは断言した
それにシヨックを受けるリュウセイ
それを見ていた一同がアハハと笑う

そうこうしているとリュウセイ達は意図も容易く目的地の魔王城に
辿り着けた

案外道のりは楽であった

やはりこちらには魔王と言う心強い味方が居るからなのだろう
だが、魔王を仲間にするなんてはつきり言ってそっちの方がチート
なのでは？

そう思ってしまう読者方は黙って見ていて欲しい

「見張りが居るな」

遠くの木陰からリユセイ達は城を覗いた

城門には西洋の鎧甲冑を見に纏った屈強そうな騎士が陣取っていた
数は二人であつた

倒すのは簡単だが騒ぎを聞きつけて残りの兵士がやってくる事にな
つては少し面倒だ

もしかしたらそれを聞いて黒幕が逃げる可能性もある
此処は慎重に行くべきだろう

「ねえ、あんた達見張りの居ない場所とか分らないの？」

かがみがサニーとシャドウに聞く

すると二人は頷いた

どうやら知ってるようだ

「はい、西門は偶に見張りがサボる時がありますんでその隙を付け
ば侵入出きると思いますよ」

「何かお約束のパターンって感じたなあ」

「そだね」

サボリと言うフレーズを聞いてオタクコンビは呆れる

そしてそれを隣で聞いていたかがみも呆れていた

「でも、もしかしたら柊先輩もあのお城の中に居る筈ですよね」

「・・・そうなるね」

ゆたかとみなみが互いに話す

「うつしやあ！うちの城分捕った連中に鉄拳制裁を加えたる！！」

拳を握り締めて魔王が言う

それを見たりユウセイはこなた達に耳打ちした

（なあ、あれってどう見ても黒井先生じゃねえの？）

（だから何度も言ってるじゃんリュウ！先生はもっと怖いから）

（こなた・・・あんた帰ったら黒井先生に鉄拳制裁下されるわよ）

横で聞いていたかがみが青ざめながらこなたに告げた

それを聞いたこなたが髪の色と同じ位青ざめた

サニーとシャドウの言うとおり西門の見張りはサボっていたせい
誰も居らず、侵入は安易に出来た

だが、城の中に入ってみると其処には

「うはあ・・・凄い数のユーザーだなあ」

そうリュウセイ達の目の前にはそれこそ大勢のユーザー達が鯨詰め
状態で入っていたのだ

これでは蟻の子一匹入れる余地がない

「にしても、これだけの数の人がプレイしてたのねえ」

「人気があるのは結構なんやけどなあ・・・」

魔王がさも残念そうに呟く

まあ言ってしまうえば此処に居る奴らは皆チートを求めてやってきた
いわば不正行為をしに来た輩の集まりなのだ
ゲームである魔王からしてみればそんな事溜まった物では無い
その気持ちはこなたとリウセイも同じであった

「ったくよお、チートに頼るくらいならコツコツレベル上げてれば
良いのによお」

「本当だよ！最近の若者は軟弱だなあ」

二人は明らかに不満タラタラな宣言をする

「ってか、あんたらも最近の若者だろうが」

其処へかがみのツツコミが入る
だが、其処は無視

「あら？何だか皆さん壇上の上を見てませんか？」

ふとみゆきが観客達の視線に気づきその方を向く

「あれ？誰か居ますよ」

「本当だ・・・誰か居る」

ゆたかとみなみもそれに気づく

リュウセイ達はその視線の先を見る
遠くて良く分からなかったが人である事は分かった
観客は皆口々に「チュン、チュン」と叫んでいた

「チュン、チュン、って・・・雀の鳴き真似か？」

「そんな訳無いでしょうが」

「誰かの名前じゃないでしょうか？」

リュウセイのボケにかがみがツツコミを入れてみゆきが推測する
壇上の上では赤い服を見に纏った黒髪の少女が何やら熱弁している

「みなさん！ハッピーRか〜」

”ハッピーーーーーー！！！！”

チュンの言葉に皆が反応する
まるで超人気アイドルのコンサートである

「うおお！凄いねこれ、前にリュウと行ったバンドのコンサートは
りの勢いだよ」

こなたが目を輝かせる

「ってか、あんたらコンサート行ったの？」

「ああ、ジャ○プロジェクトのコンサートに行ったんだ！あれはも
う燃えまくったぜ！」

握りこぶしを作ってリュウセイが熱く語る
どうやら相当熱かったようだ

「はあ、あんたら側から見るとバカップルみたいね」

「おんやあ、ひよつとしてかがみんって焼餅やいてるのぉ？」

ニヤリとした顔でこなたが言う

それにかがみが顔を赤くして否定する

「そ、そんな訳ないじゃない！絶対違うわよ！誰があんなロボットオタクなんか」

「ん？俺がどうかしたか？」

ロボットオタクと言う言葉に気づきリュウセイがかがみの方を向く
ふとリュウセイとかがみの視線が合う
するとかがみの顔は更に赤くなった

「べ、別に何でも無いんだからね！勘違いしないでよね！」

「?????・・・何だ一体？」

さっぱり意味の分からないリュウセイであった
そうこうしていると、壇上では何と先ほどサニー達が持っていた薬を取り出していた

「この薬を飲めばたちまちステータスアップ！面倒なレベル上げともおさらば出来るRよ」

”おおおおおおおおおおお！！！！”

どうやら薬は此处で販売されているらしい

それを聞いたリュウセイとこなたの額には青筋が量産される

「ふざけんなああああ！レベル上げつてのはRPGの醍醐味の一つじゃねえか！それを面倒臭がるなら初めからRPGなんてやるなあああ！」

「そーだそーだ！迷惑だああ！」

こついう所は話しの会う二人である

それを見ていたかがみ達は溜息が自然と出ていた

しかしそんな二人の声など届く筈も無く壇上の少女は更に熱弁を続ける

やがてある程度熱弁が終ったところで今度はカーテンの向こうを指した

「今回は特別なゲストをご用意させて貰ってるRよお」

と言って壇上の少女はクイクイと手招きをする

すると其処から現れたのは一人の少女であつた

かがみと同じ色の紫のショートヘアに黄色いリボンをつけておつとりした顔立ちで・・・

「って、つかさじゃねええええかあああああああああ！！」

「」

リュウセイが叫ぶ

そう、其処に居たのは紛れも無くつかさであつた

それを見て皆が啞然としていた

「何でつかさがあそこに居るんだ？・・・なあかがみ」

リュウセイはかがみの方を見るが、かがみは「知らない！私に振らないで！」と耳を塞いで涙目になって視線を逸らしていた

余程妹の醜態を見たくないのだろう

しかし当初の予定であつたつかさの搜索はこれでどうにか完了した後はどうにかして合流出来れば良いのだが

しかしこの人ごみの中を掻い潜っていくのは流石に無理である
だが、そんな中墜にこの人の堪忍袋の緒が切れた

「自分等・・・ええ加減にせんかあああああああああああ
！！！！」

そう言つて目の前で大爆発を起こしたのは言うまでもなく魔王であ
つた

それに気づいたユーザー達が口々に「わああああああ！魔王だああ
ああああ！」とか「何で魔王が居るんだああああああ！」とか「逃
げろおおおおお！」とかで大パニックであつた

しかしそのお陰でどうにか前に進める程度の道は出来た

「よし！今の内だ！」

リュウセイの言葉を皮切りにこなた達は壇上へ向かつた

とりあえずサニーとシャドウはスポンサーなので鉢合わせすると不
味いと言つので魔王と一緒に居て貰う事になつた

壇上ではパニックになつた客と突然の魔王の来場を見てチュンと呼
ばれた少女が慌てていた

「皆落ち着くR！薬欲しくないRかあ！」

身振り手振りで必死にアピールするも一度パニックになるとそう簡単には止められないのがパニックである
そんなこんなのに

「待ちやがれ！」

颯爽と壇上に躍り出たのは我等がリュウセイである

「な、何Rか！お客様は壇上上がったちゃ駄目Rよ！」

「うつせえ！そんなはた迷惑な物売ってるんじゃないやねえ！真面目なユーザーである俺達は迷惑してんだ！」

「そーだそーだ！今すぐ販売を中止しろお！」

続々と現れた皆も一緒である

こなたはと言うとリュウセイの隣で同じように非難の声を上げている

「あ、お姉ちゃん！！」

「つかさ！何やってんのよあんたは！」

つかさに拳骨をしてかがみが改めて妹の無事を確認していた
つかさは終始泣きっぱなしであったがまあ無事だったので良しとして置くことにした

「さあ！そうと決まったらそんな物騒な薬さつさと販売中止しろお！」

「フン、あんたらみたいな真面目ユーザーに私が倒せるRかあ！」

リュウセイに向かって不敵に微笑むチュン

すると彼女は目の前に巨大な魔方阵を展開させる
すると其処から無数の兵士が現れた

皆鎧甲冑を見に纏った屈強そうな騎士ばかりである

「へ、物量戦で行くつか？上等だ！相手になってやる！」

「ちよつと、1人でなんてムチャよりユウセイ！」

「私も援護しますよりユウセイさん！」

「しょうがないなあ、んじゃ私も人肌脱ぐよりユウ！」

「私も・・・援護します」

リュウセイ、かがみ、みゆき、こなた、みなみは一斉に召還された
騎士に向かっていく

騎士のどれもがかなりの高レベルであり苦戦は必須の筈であつた
だが、

「唸れ鉄拳！T・LINKナツコオオオ！！！」

念動力に目覚めたリュウセイにとってはその騎士のどれもが雑魚程
度でしかなかった

所詮はプログラム

幾多の修羅場を潜り抜けてきたリュウセイにとっては赤子の手を捻
るより簡単であつた

近づく敵には念動力の籠った鉄拳を叩き付け

遠くに居る敵にはG・リボルヴァーで額を撃ち抜いていく

正に鬼神の如き戦い振りである

「ったく、リュウセイ1人に良いカツコさせられないわよ！」

だが、かがみ達も負けては居なかった

マジシャンであるかがみは遠くから魔法弾を放ち騎士達を牽制し、騎士であるみゆきは巨大な剣をまるで棒切れの如く振り回して吹き飛ばし、こなたはシーフなので懐から騎士達の所持品をかつぱらい、みなみは遠距離から騎士達の急所を射抜いていた

「ってか、こなた！あんた盗んでばっかじゃない！少しは戦いなさいよ！！！」

「それは無理だよかがみん。だって私盗賊だよ！防御力紙だよ！一撃でやられちゃうから無理無理」

と言いながらも隙を見せれば後ろから騎士の急所をサクツとやっってしまう辺りは流石と言える

そんなこんなの一団の活躍で召還された騎士達は当初の数の四分の一にまで減っていた

だが、そんなリュウセイ達の戦いを遠くから見ている者が居た

「フツ、どうやら念動力には覚醒したみたいだな・・・だが、まだサイコドライバーとしての能力には目覚めていないと見える」

声からして男性であった

その男はリュウセイの戦い振りを見てほくそえんでいた

壇上には騎士達の山が築かれていた
そう、皆やられたのだ

あれだけの激戦を繰り広げたと言うのにリュウセイには軽く運動したと言う程度の汗しか流れていない

「どうだ！これでもまだ諦めないって言うのかよ！」

「むむむ、何て強い人達Rか！ってか、拳闘家にそんな能力無いRよ！」

チュンが先ほどからリュウセイが使っていた念動力を指摘する

「え？今のつて拳闘家の隠しスキルじゃないの？」

こなたからそう聞かされたかがみは驚く

「そんな訳無いR！拳闘家はあんなスキル無いし、銃なんて扱えないRよ！」

「く、詳しいんですね」

以外にも博識なチュンにみゆきがたずねる

「当然R！私だってこのゲームのユーザーR！でもレベル上げが面倒だと思ってたら青い髪の男の人がこれを使えばそんな問題解決だつて言ってくれたんで試したら大当たりだったRよ！」

「青い髪？・・・何処かを見たような」

リュウセイの脳裏に青い髪と言われて浮ぶ人物が居た
だが、その人物はもう既にこの世に居ない存在である

まさかな、と自身の考えを否定するリュウセイ

「とにかく、もっと薬が欲しかったら此処で売りさばけて言われ
て言うとおりにしてただけR!」

「どうやらあの子が黒幕じゃなさそうね」

「でも・・・それじゃ黒幕は一体?」

みなみが誰が黒幕なのか疑問に思っていた
すると

『ご苦労だったな』

とカーテンの向こうから男の声が響いた

そしてゆつくりとカーテンの向こうから姿を現した

その男は青い色で肩まで掛かる長い髪をしておりキツイ目をしてお
り数手先まで見据えた感じを放っている男であった
その男は

「て・・・てめえは・・・」

「う、ウゾォ!まさか此処にあの人が来てるなんて!」

リュウセイとこなたは信じられないと言った顔で見ていた

其処に立っていたのは紛れも無く、二人の知ってる人物であった

「何でてめえが此処に居るんだ!イングラム・プリスケン!!!」

「リュウセイ・ダテ、其処で眠ってる雑魚を倒した位で良い気にな
ってるのだとしたらお笑いだぞ」

リュウセイにフツと不気味な笑みを浮かべるイングラム
それに「何だと!」と怒りの籠った顔をするリュウセイ

「ね、ねえこなた！あんた知ってるの？あの人」

かがみが聞く

するところなたが頷く

「あの人はイングラム・プリスケンって言ってね・・・ゲームのラ
スボスみたいな位置の人なんだよ・・・とにかく凄い強いんだよ」
「ちよつと待て！何でゲームのキャラクターがリュウセイの事知っ
てるのよ！」

「そ、それは・・・その・・・」

かがみに問われて返答に困るこなた

以前リュウセイには黙って欲しいと言われたばかりなのだ

その為真実を話す訳にはいかない

だが、その間もリュウセイとイングラムは互いににらみ合っていた

「俺達を此処に呼んだのもお前の仕業なのか？」

「そうだと言ったら・・・どうする？」

明らかに食って掛かるような笑みを浮かべている

それがリュウセイには癪に障った

「今すぐ俺達を元の世界に戻せ！」

「それは無理だな、お前達にはまだやって貰わないといけない事があるんでな」

「何？どういう事だ！」

リュウセイが問う

だが、それより早くイングラムが動いた

咄嗟に身構えようとしたがそれより早くイングラムの蹴りがリュウセイの腹に当たる

「グハアッ！！！」

蹴られたリュウセイが信じられない程遠くまで吹き飛ばされる
そして壁に叩きつけられて壇上に落ちる

「りゅ、リュウセイ君！」

近くに居たつかさがリュウセイに近づく

「ちょっとあんた！一体リュウセイとどういう関係なのよ！」

かがみが持っていたロッドを構えてイングラムをに問いつける
だが、イングラムは答えようとはしない
未だに不敵な笑みを浮かべていた

「答えないってんなら！力付くでも応えて貰うわよ！」

そう言ってかがみが呪文を唱える
だが、

「撃ちぬけ！ガンスレイブ！」

突如イングラムの背後から蝙蝠のようなビットが数機飛び出し詠唱
中のかがみに襲い掛かった

「キヤアッ！」

幸い直撃こそ無かったが先の一撃でロッドを手放してしまった

「かがみさん！」

「かがみん！大丈夫？」

その場に蹲るかがみに皆が集まる
するとそんな皆を薄黒い膜が包む

「うお！何これ？」

「と、閉じ込められたんですか？」

こなたとみゆき達は必死に膜を叩くもまるで壁を叩いているみたい
で反応が無い

その向こうでイングラムが笑っていた

「お前達はリュウセイの覚醒の餌になって貰う・・・なあに、命ま
では奪わないさ」

「い・・・イングラム・・・てめえ！」

未だにダメージが抜け切らない体でリュウセイはイングラムを見る

「リュウセイ、俺が憎いか？ならばもつと憎め、そして強くなれ、
そうでなければお前では誰も守れないぞ！此処に居るお前の友達も
なあ」

そついうと突如リュウセイとつかさの足元が無くなり二人は真っ直
ぐに真下へおちて行った

「きゃあああああああああああああああああああ！」

「うわあああああああああああああああああああ！」

その光景を閉じ込められていたかがみ達は見ていた

「つかさあああああああ！リュウセイいいいいいいいいいいいいいい！！！」

かがみが閉じ込められていた膜の中で叫ぶ
だが、その声はリュウセイに届く事は無かった

第6話 過去

此処は魔王城にある地下牢

その中にこなた、かがみ、みゆき、ゆたか、みなみ、そして魔王にサニーにシャドウが入れられていた
勿論入れたのはイングラムである

「こらあ！此処から出せえ！」

牢屋の柱をガチャガチャ動かして叫ぶ

だが、それで開ける程目の前に居るイングラムは優しい人間では無い
彼は暴れるこなたの前で不敵に微笑んでいた

「大人しくしている、そうすれば手荒な真似はせん」

「何言ってるのよ！十分手荒じゃない！」

かがみの額に青筋が浮ぶ

だが、イングラムの表情は一向に変わる気配が無い

「どうしてこんな事をするんですか？」

「お前達には関係の無い事だ。其処で黙っていれば良い」

「ゴラァ！んなの出来る訳ないやろが！それに此処はうちの城やで！勝手な真似すんなや！」

「意義があるなら其処から出て俺の目の前で言ってみたらどうだ？
・・・出来ればの話しだがな」

「・・・・・・・・」

イングラムの言葉に魔王は押し黙った

今彼女達が入ってる牢屋は一切の魔法を封じられてしまう牢屋なのだ

その為魔王ではこの牢屋を破る事は出来なかったのだ

「案ずるな、お前達の事はきつとリュウセイが助けに来るだろう」

「リュウセイが？」

「そっか、まだリュウが居るんだ！」

イングラムの言葉を聞き一同の顔がパツと明るくなった

「何言ってるRか？そのリュウセイって奴はついさっきイングラムが地下に落とした筈Rよお！助けに来れる筈無いR」

チュンが胸を張って言う・・・が、そのチュンも何故か牢屋に入れられていた

「って、何で私まで入れられてるRかぁ！」

「お前の役目は終わった。騒がれると面倒なのでな、其処で大人しくしてろ」

「酷いR！言うとおりにしたのにその扱いって無いRよ！」

牢屋の中でチュンが喚き立てる

それを周りのメンバーが五月蠅そうに耳を塞ぐ

しかしイングラムは大して気にする素振りなど見せないでいた

「だが、万が一リュウセイが地下で死ぬような事があった場合・・・お前達は基調なサンプルとなって貰うか」

「ウゾォ！それってマジ？」

鉄格子を掴んでいたあなたが青ざめていた

それが何なのか分からないかがみ達は只首を傾げているだけであった

「お姉ちゃん、そのサンプルって一体どんな事されるの？」

「うーん、簡単に言くと、頭の中を弄られたり変な風に改造されたり、後はホルマリン漬けみたいにされたりするところかな」

「そ・・・そんな目に遭うんですか・・・私達」

みなみと聞いたゆたかは真っ青になった

「じよ、冗談じゃないわよ！サンプルなんて御免だからね！」

「私事です。そんな恐ろしい目には合いたくありません」

「私ですよお」

「私だって！」

「私だって嫌Rよお！」

「うちかて嫌やあ！」

牢屋内でこなた達がギャーギャー騒ぎ立てていた

水滴のひんやりした感覚がリュウセイの頬に伝わり、それが元で目を覚ました

辺りを見回してみると、其処は薄暗く、終始水の流れる音が聞こえる
どうやら地下水路のようだ

体の各所はどうやら何処も骨折はしていないらしく、幸い後頭部が少し痛むだけで済んだようだ

ホッとして起き上がろうとしたリュウセイの目に留まった物は・・・
自分の上で寝息を立ててるつかさであった

「お・・・おゝい、つかさゝ起きろゝ」

とりあえず起こさないと自分が動けないので声を掛ける
だが、そんな事で起きる筈も無く

「うゝん、後5分だけゝ、ホントにゝ」

と言って再び寝に入ってしまった
参ったなあ、こう言う後5分って大概当てにならないんだよなあ
現に自分も似たような事があり、その時はライに義手パンチを食ら
って無理矢理起こされた記憶がある

あれは涙物だったのを覚えている
しょうがないか、幾らなんでも殴るのは不味いから・・・そう思い
ながらリュウセイは人差し指で軽くつかさのデコを小突く

「ふえっ、あ、もう朝？」

「何寝ぼけてんだよつかさ」

寝ぼけ眼のつかさに呆れた顔のリュウセイが言う
つかさはやっ自分置かれてる状況に気づき物凄い慌てようでリ
ュウセイから飛びのく

「あわわ！ご、御免ねリュウセイ君！私てつきり家のベットのなか
と思っちゃって」

あたふたした顔で必死に弁解するつかさは置いておいて、とりあえ
ず自身の服についた埃等を払う

そして未だにあたふたしてるつかさにニツと笑って見せた

「別に怒っちゃいないさ。それよりさっさと皆のここに行こうぜ」
「う、うん」

リュウセイの言葉につかさは頷くも何故か顔が真っ赤であった
何故赤いのかリュウセイは分からないので心配になったリュウセイ
がそつとつかさの額に手ヲ乗せる

「大丈夫か？顔が赤いぞ」

「え？・・・えゝえと・・・だ、大丈夫・・・かなあ・・・／＼／」

どもった声で言う

とりあえず安心だと言うのでそれ以上聞く事はしないで置いた
さて、そう思つて立ち上がろうとした時、突如リュウセイの右足に
激痛が走った

「痛ッ！！！」

痛みの余りその場にしゃがみこむ

痛みは足首辺りの所からする

少しズボン上げて見ると足が青く変色して少し腫れていた
恐らくヒビが入ってるだろう

「・・・参ったなあ」

「大丈夫？リュウセイくん」

「悪い・・・ちよつと足にヒビが入っちゃったみたいだ」

「ふええ！だ、大丈夫なの？凄く痛そうだよ」

怪我したリュウセイの足を見てつかさが青ざめた顔をする

側から見てもそれはとても痛そうであつた

だが、リュウセイは余り心配かけないように顔は笑っていた
そんなリュウセイの足につかさがそつと手を触れる

すると怪我したリュウセイの足にか暖かな光が包み込まれる
やがて光が晴れると其処にはリュウセイの怪我はなくなっており腫
れも引いていた

「おお！ すごい、痛みが消えたぞ！！ サンキュー、つかさ」

立ち上がってジャンプしたりしてみたが全く痛みが無い
これなら普通に動いても平気だ

「あ、そう言えばつかさは僧侶だから簡単な回復魔法は使えるんだ
っけな」

「えへへ、私役に立ったかなあ？」

「ああ、立ちまくりだよ！ 有難うなつかさ」

満面の笑みでつかさに言うリュウセイ

その顔を見てつかさの顔はまた真っ赤になった

しかし一向にその顔の意味が分からないと言う鈍感なリュウセイで
もあつた

その頃、こなた達は仕方なく牢屋の中で待つ事になった

そんな牢屋の中かがみが疑問に思っていた事をこなたに聞いていた

「ねえ、こなた！ずっと思ってたんだけど、リュウセイって一体何者なの？」

「又アツ突然何を言い出すのかねかがみん！リュウは列記とした私達のクラスメイトじゃん！」

「本当？その割には何処がおかしくない？スキルだってゲームになるのを使ってるし、それにあのイングラムって人の反応・・・あれ明らかにリュウセイの事を知ってる素振りだったわよ！勿論リュウセイもだけど」

「本当に彼は何者なのでしょうか？」

みゆきまでもが疑問に思い始めていた

そんな中、こなたは返答に困る

（どうしよう・・・リュウには真実は黙って欲しいって言われているけど流石かがみんだよ。もう気づき始めてるよ・・・このままだと隠し通すのも限界な気がしてならないよ・・・どうしよう）

汗だくになって返答に困っていたこなたの横でふと、ゆたかが思い出した

「そう言えばあのダテさんってお姉ちゃんが見てたアニメのキャラクターに似てるよね」

ゆたかのその一言にこなたが「ギクウ」となる
その反応を皆は見逃さなかった

「泉さん、どう言う事が説明して貰えますか？」

「こなた・・・私達に言えない事なの？」

みゆきとかがみがこなたに迫る

「私も・・・知りたいです」

「私もRよお」

みなみとチュンも迫る

それに遂に観念したのか

「分かったよお・・・でも、今から言うのは全部嘘じゃなくて本当の事だからねえ」

と、溜息混じりに話す事になった

リュウセイとつかさは薄暗い地下水路を歩いていた

つかさは怖いのかリュウセイにベツタリである

リュウセイは特に気にも留めていない様子で前を進む

時折つかさがちゃんといてきてるか気にしながら歩いていると、

「でもリュウ君って凄い強いんだねえ、あの鎧の人達をあっと言う間にやっつけちゃうんだもん」

「へへ、あんなの大した事無かったぜ・・・ってか、リュウ君？」

突然自分の呼び名が変わった事にリュウセイは気づきつかさを見た
するとつかさは頬を赤らめて言った

「えっと・・・こなちゃんもリュウって呼んでるから私も呼んでみ
たくなつて「リュウ君」って呼んでもたんだけど・・・迷惑かなあ
？」

「いいや、別に呼びたけりゃ構わないぜ」

リュウセイは笑って言った

「そ、それじゃ宜しくね、リュウ君」

「おう！任せておけ！」

頼もしくリュウセイは言った

そしてそのまま二人は薄暗い地下水路を進んでいた

その間は特に何も無く、只薄暗い通路が続くのみであった

通路は人一人がやっと歩ける程度の道幅しかなく、その隣では汚れ
た水が流れていた

余りこんな汚れた道を歩きたくは無いので乾いた道を歩いていたのだ

「お姉ちゃん達・・・大丈夫かなあ？」

「大丈夫だろう、お前の姉ちゃんだしきつと元気にやってるさ」

何の根拠も無くリュウセイが言う

それを聞いてつかさが苦笑いを浮かべる

どうやらリュウセイもかがみの怖さは身を持って知っているようであ
る

確かに何かとこなたと一緒にかがみに殴られるのは日常茶飯事であ

った

まあ大半の原因はこなたとリュウセイにあるのだが・・・

それでもリュウセイは学校では常に笑顔で居た

よっぽど学校が好きなのだろう

だが、つかさは思っていた

時々見せるリュウセイの重い顔を

一体その笑顔の下にはどんな辛い過去があるのだろうか・・・

それは今のつかさには分からない事であった

「はあ！リュウセイは実はアニメの世界のキャラクターですってえ
！」

かがみはこなたから聞いた真実に驚いていた
無理も無い話である

今まで何の変わりも無く普通の生徒として過ごしてきたクラスメイ
トがアニメのキャラクターだなんて言われたら誰だって驚く物である

「皆は知らないと思うけど「スーパーロボット大戦OG」ってアニメ
の主人公なんだよリュウセイは」

「へえ、凄いだねえダテさんって」

「でも・・・それじゃダテ先輩のあの力は・・・一体」

「そうR！あんなのゲームに無い能力Rよ！あれはどう説明するR

か？」

皆が今度はリュウセイの使っていた能力について聞き出す
それにもこなたは答える

「あれは『念動力』って言って簡単に言うとまあ超能力みたいな物
だね」

「はあ？それってあれか？片手でスプーンを曲げる奴か？」

「魔王さん、発想が古いですよ・・・それにそんな力じゃなくて、
まあ言っちゃうとニュータイプに似た力かな？」

「ってコラ！此处ではガンダムの『ガ』の字も出てこないのにその
フリーズは無いんじゃないの？」

かがみがツツコミを入れる

が、とりあえずは無視していく方針で

「んじゃその念動力のお陰でリュウセイはあないに強いのか？」

「いんや、リュウは元の世界でロボットに乗って戦ってたんだ。そ
の中で色々な局面を乗り切っていく内にリュウは一人前の戦士にな
ったんだよ」

こなたがリュウセイの居た世界の話しをする

それはリュウセイの元居た世界は自分達の居る世界より遙か未来の
「新西暦」と呼ばれる時代である

そしてその世界ではPTと呼ばれる巨大ロボットを使い人間同士が
争っていた時期があった

人々はそれを「ディバインウォーズ」と呼ぶ

ディバインウォーズは戦争の発端となった人物「ビアン・ゾルダー
ク」と「マイヤー・V・ブランシュタイン」の死により幕を閉じた
だが、その後地球に攻めて来たのは異星人「ゼ・バルマリイ帝国」、

略称「バルマー帝国」であった

リュウセイ達は多くの仲間達と試作型PT「R・シリーズ」、そしてその合体したスーパーロボット「SRX」でこれに挑んだ。因みにイングラム・・・フルネームで言うと「イングラム・プリズケン」は元々リュウセイが所属していた部隊「SRXチーム」の隊長を務めていたのだが、実はバルマー帝国が送り込んだ作業員であったのだ。

イングラムはバルマーとの開戦とほぼ同時にリュウセイ達の下を去り敵となり彼等の前に現れたのだ。

しかしその真の目的はリュウセイを真の力に目覚めさせる為であり、結局死の間際でイングラムの本心を聞けたのであった。

その後、バルマー帝国の切り札である「ズフィールド」を倒し世界に平和が訪れた。

此処までは原作の話である。

しかし違ったのはその後であった。

リュウセイは確かに一度はズフィールドを倒した。

しかし、トドメを刺しきれなかったせいからズフィールドは再生を開始したのだ。

もう一撃を与えれば倒せたのだが、今のリュウセイ達にはもう戦う力は残っておらず、リュウセイは最後の手段としてR・シリーズの一機である「R-1」で突撃を慣行したのだった。

その際に強い光に包まれてしまい、気がつくとリュウセイはこなた達の前に居た・・・と言う話である。

「そんな事があったのですね」

みゆきは改めてリュウセイの秘められた過去を知り驚いた顔をしていた。

「皆、悪いけどこの話はリュウには内緒にしてね」

「へ？何でよ」

「実はこの話はリュウに口止めされてて、話したって事がバレると多分私怒られちゃうからさ」

「はぁ・・・分かったわよ」

溜息混じりにかがみは了承する

それを聞いてこなたは安心する

だが、今はなんとしても此処から脱出するのが先なのだが、とりあえずこなた達はリュウセイを待つ事にした

（早く来なさいよりリュウセイ！でないと私達サンプルにされちゃうんだからね）

内心焦っていたかがみはリュウセイが早く来る事を念じていた
しかし、それに気づいたかがみはふと顔を真っ赤に染める

（え？な、何でリュウセイの事を意識したんだろう？・・・ぜ、絶対あれよ！リュウセイしか今の状況を打開出来ないからであって決してあっちの方に行く事は間違っても無い訳であって・・・えっと・・・その・・・）

1人混乱しだすかがみであった

此処は城の中にあるであろうモニター室

其処ではイングラムがあるとある部屋を見ていた

其処はリュウセイとつかさが歩いていた地下水路であった

「フツ、リュウセイ・・・お荷物を抱えた状態で何処まで行けるか・
・見させてもらうぞ」

そう言つてイングラムは目の前の装置を操作する

リュウセイ達の前に突如として空間の揺らめきが発生した

「わわ、何？」

「これは・・・空間転移？」

咄嗟にリュウセイは構えた

すると空間の揺らめきが強まりやがて凄まじい閃光を放つ

思わず目元を押さえるリュウセイとつかさ

やがて光が収まり目を開けてみると、其処には紫色の結晶体で体を構築された背丈はリュウセイとほぼ同じ位の生命体が立っていた
だが、その生命体はかつてリュウセイが最後に戦った敵に似ていた
事であった

「まさか・・・こいつら、ズフィールドか？」

そう、リュウセイとつかさの前に立ちはだかったのは一体の「ズフイルド」であった

第7話 集結

時は同じくして・・・

「いやあ、やっぱ先輩達に任せて自分達は何もしないってのはなんか不味いツスよねえ」

「そうデエスネエ・・・やっぱり此処は差し入れを入れるべきデエス！越後屋の菓子包みデエス」

「パティさん・・・それ少し意味違うツスから！そして何でそんな古いネタ知ってるツスか！」

ひよりとパティが話しながらパソコン室に向かっていた

どうやらリュウセイ達に仕事を押し付けて自分達だけ何もしないと言うのは気が引けるらしくこうして差し入れを持ってきたのであった

「でも先輩達怒ってないツスカねえ？」

「大丈夫デエス！きつと先輩達は広い懷で私達を温かく包み込んでくれる筈デエス！」

「そんな根も葉も無い根拠は一体何処から生まれるんスカねえ？」

相変わらずプラス思考のパティに半ばあきれ果てるひより

そんな感じの会話をしていると廊下を歩いている途中で二人はある人物達と出会った

「ん？お前等まだ居たのか？」

「あれ？そう言う先輩達もまだ居たんスカあ？」

其処に居たのはかがみと同じクラスのみさおとあやのであった

「いやあ、家の出し物も一段落終えたから柊と一緒に帰ろうと思つて探してたんだよなあ」

「ああ、柊先輩ならパソコン室に居るツスよお」

「私達今先輩達に差し入れしに行く所だったデース！」

「あら、そうだったのね。だったら私達も一緒に良いかしら？」
「どうぞどうぞツス」

あやのの提案にひよりも断る理由も無いのでOKをした
そして四人はパソコン室に辿り着き普通に扉を開けた
ガラガラと音を立てて扉が開く

だが、其処にあったのは無人のパソコン室であつた
誰も居ないので帰つたのかと普通は思うのだが今のパソコン室はどうも様子が変であつた

それは彼等の荷物が全て置きっぱなしだったのだ
トイレかなと思つたが全員一斉にトイレに行くなど考え難い
それにそうだとしたら一応部屋の明かりは消す筈である
しかし部屋内には未だに明々と明かりが灯っている
それどころか周りのパソコンの数台はつきっぱなしである
明らかにおかしいのだ

まるで突然その場から消えてしまったかのように
しかし一体何故

「あり？何で皆居ないんだろう？」

当然の如くひよりが首を傾げる
それに他の三人も同様であつた
時間もかなり行つてゐるし帰つてると言う考えもあつたにはあつたが、

それでも荷物を全て置きっぱなしと言うのは考え辛いシチュエーションである

では一体皆は何処へ？

「ん？おや！これはもしや……」

ふと、ひよりは一台のパソコンに駆け寄った

それは先ほどこなたが「ラッキースターユニバース」を起動させていたパソコンであつた

丁度画面にはキャラクターメイキングが終了し町に繰り出している場面であつた

「うおおおおおおおおお！これってあの巷で有名な「LSU」じゃないッスかあああああ！くううう！私予約したのに手に入らなかったッスよお」

「ひよりんだらないデエス！私なんか『布教用』『鑑賞用』『プレイ用』にと三本持つてるデエス！」

「ま、負けたッス……」

パーティの発言にひよりは愕然としその場に倒れる
するとそれに気づいたあやのとみさおもやってくる

「何だ？ゲームか？」

「あら？それは何のゲーム？」

みさおとあやのも興味を示し画面を見る

すると四人の前にあつた画面が突如激しい閃光を放つ

そう、あの時リュウセイ達を飲み込んで行ったのと同じ現象であつた

「うお！まぶしいッス！」

「ひよりんナイスネタデス！」

「言ってる場合じゃないってヴァ！」

「ま、前が見えない！！」

突如光り出した閃光により四人は完全に視界を封じられる

そして、閃光が晴れた時、パソコン室は再び無人となっていた

地下水道を歩いていたリュウセイとつかさの前にはかつてリュウセイが倒した強敵『ズファイルド』が立っていた

しかし大きさはリュウセイより頭一つ分位大きい程である

しかしそれでも其処から放たれる威圧感は相当な物であり、見ているリュウセイも震えが止まらなかった

ふとリュウセイはつかさを見た

つかさはズファイルドを見てかなり怯えている

無理もない

戦闘を経験したリュウセイですら未だにズファイルドを見ると震えが起こるのだ

ましてつかさは今まで戦争を経験していない一般のしかもまだ20年は生きていない高校生なのだ

気絶しないだけマシである

「つかさ、離れてろ」

出来るだけつかさを戦闘に巻き込む訳にはいかない
そう思ったリュウセイはつかさに後ろに下がるように言った
それに対したつかさはリュウセイの身を案じるような視線を送ったが
それにリュウセイは黙って笑顔で返した
それには「大丈夫だ」と言いたげな意思がこめられているのが分かった

それを見たつかさは軽く頷いて数歩下がる
それを見届けたリュウセイが向き直る
其処には未だにズフィールドが立ち尽くしていた
その表情はまるで「準備は終わったか？」と言いたげな顔であった

「待たせて悪かったな。それじゃ今から始めるか！」

と言ってリュウセイは構える
だがズフィールドは構えない
リュウセイは何故構えないか理由は分かっていた
構える必要が無いのだ
構えなくてもリュウセイ1人なら軽く捻ることが出来る
そう思っているのだろう

しかしその考えは決して慢心では無い
揺ぎ無い事実なのだ

実際リュウセイもズフィールドを倒せたのは元の世界に居た仲間達の協力のお陰なのだ

しかし今この場で戦えるのはリュウセイ1人である
果たして勝てるかどうか

ええい、迷うな！

頭を強く振り弱い意志を振り払う

弱い考えを持つていればその考えに自分の心が持っていかれてしまう
気持ち強く持てリュウセイ・ダテ！

自身にそう言い聞かせて気持ちを奮い立たせる

そして息を溜めて地を蹴るそして拳を握り締めて振り上げる

振り上げた拳に緑色のオーラが纏われる

これがリュウセイの持つ力「念動力」なのだ

そしてそれを一点に集中させて放つ一撃なのだ

この技はリュウセイ曰く「T-LINKナックル」と称されており
リュウセイ自身この技を多用していたのは言うまでもない

しかしそれをまさか生身で放つ事になるうとは思ってもいなかったが
振り上げてオーラを纏った拳を思い切りズフィールドに叩きつける
だが、その一撃がズフィールドに届く事はなかった

ズフィールドの前には見えない壁の様な物が展開されておりリュウ
セイの手にはまるで分厚い壁を叩いたような錯覚に見舞われた

障壁か！

リュウセイは舌打ちする

殴った腕が痺れる

骨に異常は無いがかなり痛い

こりゃ相当硬い障壁だ

破るとなると骨が折れる

そう思えた

「リュウくん危ない！」

「！！！」

つかさの言葉を聞いてリュウセイは咄嗟に後ろに下がる

その面前をズフィールドの巨大な腕が空を切る

危なかった

つかさの声が無かったら今頃直撃を食らっていた筈だ

生身であの一撃は痛すぎる

食らえば一溜まりも無いだろう

「くそ！こつちは生身なんだから少しは手加減しやがれ！」

愚痴りながらも懷に差し込んでいたG・リボルバーを抜き放ちトリガーを引く

狙いは勿論ズフィルードの頭部

しかしやはり障壁の効果により弾丸は弾かれ壁にめり込んでいく結果となってしまうた

やはりこれでは威力が低いので破るのは無理か

分かつてはいたがいざ目の前でそうされると些ちやかショックを受けるだが、諦める訳にはいかない

俺の後ろにはつかさが居る

もし此処で俺が倒れてしまえばズフィルードはきつとつかさを狙ってくる筈だ

つかさは元は戦いの経験も無い一般の少女なのだ

そんな少女がこんな怪物を相手にして無事で居られる保障など万に一つとして無い

ならば此処で俺が仕留めなければならない

絶対に負けられないのだ

「俺が此処で負けるわけにはいかねえんだよおお！」

リュウセイが叫ぶ

そして今度は両手にオーラを纏わせる

そしてそれを左右交互にぶつけていく

しかし障壁は波打つばかりで全く破れる気配がしないそれでもひたすら殴り続ける

最早俺にはこの手しか無いのだ

一発で駄目なら十発！それでも駄目なら百発でも千発でもお見舞いしてやる

そんな思いでひたすらリュウセイは結界を殴りつけた

殴っている手の甲の皮が剥けて行き鮮血が飛び散る
痛みが手を通り越して腕、そして肩にまで伝わって来る
だが、それでもリュウセイは腕を下ろす事はしなかった
最早意地である

リュウセイの腕が使い物にならなくなるのが先か？

ズフィルードの結界が破れるのが先か？

これは正に賭けであつた

しかも分の悪い賭けである

もし自分が負ければ待っているのは最悪の結果である
何としても勝たねばならないのだ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！
」

雄たけびを上げる

そして今以上に殴る力を、速度を強める

それにより鮮血の飛び散る量も増していた

「リュウくん！もう止めて！！このままじゃリュウくんの腕が壊れ
ちゃうよお！」

涙目になつたつかさが叫ぶ

彼女も心配なのだ

このままではリュウセイはボロボロになつてしまふ

それだけは嫌だ

そう思つたからこそつかさは声を上げたのだ

だが、それで止まるリュウセイでは無い

例え両の拳が砕けようとも絶対にこの攻撃だけは止めない

そんな不退転の覚悟で殴り続けていたのだ

すると、先ほどまでビクともしなかった障壁に徐々にだがヒビが入

りだしたのだ

それに驚くズフィールド

それを見てチャンスと思ったりリュウセイは拳を更に振り上げて握り締める

皮は完全に向けてしまい血でベトベトに汚れていた

だが、目は死んでいなかった

その闘志は死んでいなかった

熱く燃え滾る視線でヒビの入った一点を睨みつけて拳を放つ

「これで・・・どうだあああああああああああああああ！！！」

リュウセイの渾身の鉄拳が炸裂する

するとどうだろう

今までビクともしなかった障壁が音を立てて崩れたのだ

それには流石のズフィールドも驚かされる

「貰ったあああああああああ！」

そしてそのまま畳み掛けるようにリュウセイが更なる一撃を加えようと拳を突き出す

だが、そこで奴が・・・ズフィールドが動き出したのだ

ズフィールドの太い腕がリュウセイの溝を捉えて殴りつける

「がはっ！」

振り下ろされた拳を諸に食らったリュウセイは声を上げてそのまま地面に叩きつけられる衝撃と砂煙が舞い上がる

それによりリュウセイの姿は完全に見えなくなってしまった

「リュウくん！」

つかさは咄嗟にリュウセイに駆け寄ろうとする

だが、それをズフィールドが阻む

リュウセイを倒したと思ったズフィールドが今度は標的をつかさに変えてゆつくりと歩み出す

つかさにズフィールドに対抗出来る力など無く只後ろに下がる

それを悠々と追うズフィールド

だが、そんなズフィールドの足を何者かが掴んだ

振り返る

すると其処にはリュウセイが居た

「よお・・・まだ俺との勝負は終ってねえぜ・・・そう焦るなよ・・・」

そう言つてリュウセイは渾身の力を込めてズフィールドの巨大を持ち上げて後方に投げ飛ばす

投げ飛ばされたズフィールドはそのまま背中から大地に倒れる

その隙にリュウセイは立ち上がり振り替える

腹には確かに殴られた跡があつた

だが、それは咄嗟にリュウセイが自分の腹を守るように念動力を収束して壁を作つたのだ

もしそうしなければ今頃自分の腹には風穴が開いていた筈である

其処はリュウセイの機転の良さが救いをもたらしたのであつた

「へへ、でかい図体の割りにはパンチは軽いんだな・・・今度は俺の攻撃だぜ！」

そう言つてリュウセイは再び両の拳にオーラを纏わせる

しかし動きが違つていた

殴りに行くのでは無い
纏った両の拳を目の前に持ってきて更に念を研ぎ澄ませる

「波を念じて・・・刃となれ・・・」

小さくそう呟く

そして放つ

その一撃の名は

「天上天下！念動破碎剣！！」

リュウセイが叫び両の拳に込められていた念を放つ

放たれた念はリュウセイの想いに答えるように剣の形になった

そしてその剣はそのままズフィルドの胸に深く突き刺さった

必死にズフィルドはその剣を抜こうと手を伸ばす

しかし掴もうとした途端その腕は音を立てて崩れ去っていく

強い念で作られた剣を掴む事は出来なかったのだ

そしてそのままリュウセイが手を手刀のように構えて突き出す

「波アアア！！！！」

そして叫ぶ

すると剣はズフィルドの体を突き抜けて遙か遠くへ飛んでいった

その衝撃は凄まじくズフィルドを縦に両断してしまったのだ

両断されたズフィルドはそのまま地面に倒れると煙を巻き上げて

溶けるように消え去ってしまった

「ふう・・・どうにか勝てたあ」

勝利出来た事に安堵したりリュウセイはその場に腰を降ろす

其処へつかさが駆け寄る

「リュウくん、腕大丈夫？」

「へ、腕？・・・いて！！！」

此処でリュウセイは改めて自分の腕を思い出した
見てみると皮は殆ど剥けており血まみれであつた
やはり無理しすぎたのだろう

急いでつかさは治療に当たる

すると何処からか複数の足音が響いてきた

数からして少人数である

しかし今リュウセイは負傷しておりつかさには戦闘能力は余り期待
出来ない

もし城の兵士ならかなりやばい状況である

そう思っていた

だが、その足音の正体は以外な人物達であつた

「あれ？伊達先輩ツス！」

「ホントデス！」

「おお！伊達に柊妹じゃねえか！」

「伊達くんに柊ちゃんもこの世界に来ていたの？」

それはひよりとパティとみさおとあやのであつた

しかし四人共元の世界の制服では無くこの世界の衣装であつた

「お、お前等もこの世界に来たのか？」

「ええ、パソコン室でラッキースターユニバースの画面を見てたら
突然光り出して・・・」

「気がついたら此処に居たの」

「私達と同じだね」

みさおとあやのの進言につかさが間延びした声で答える

「そんな事よりよお柊達は何処だ？」

「そうだ！かがみ達がこの城の奴らに捕まってるんだ！」

「げ！マジかよ！柊も案外ドジだなあ」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょみさちゃん！とにかく助けに行かないと」

「ああ、誰か牢屋の場所分かるか？」

「それならご心配なく！さっき宝箱から見つけた地図で場所はハッキリ分かるデース！」

「流石パティさん！抜け目ないツス」

パティが懷から一枚の紙を取り出す

それは確かに地図であつた

しかもこの城全てが細かく書かれていると言う何とも有り難い設計である

「あ、そうでした！それとこんな物も見つけたのですが私じゃ装備できません。だれか持てる人居ますかあ？」

と言ってパティは目の前に武器を置いた

それは

「な、これってブーステッドライフルじゃねえか！それにこの刀は・
・・」

リュウセイはふと置かれた刀を手にとってじっと見た
何ともほればれする作りである

これが世に言う業物なのだろう

柄には獅子の絵が掘られている

「獅子の絵・・・獅子・・・百獣の王・・・獅子王・・・よし！コイツは今日から獅子王剣だ！」

「な、何とも安直な名前ツスねえ」

明らかにリュウセイらしい名前の付け方にひよりは苦笑いを浮かべる
そんなひよりにリュウセイは指を鳴らす

「何言つてんだひより。スーパーロボットの必殺武器つてのは安直でダサくてカッコイイのが基本だぜ」

「そ、そうなんですか？」

驚くひより

そんな二人の会話についていけないのか皆は苦笑いを浮かべてこれを見ていた

「そんじゃさつさと柊達を助けに行こうぜ！」

「おう！待ってるよ皆！」

リュウセイは拳を握り締めてそう呟く

牢屋に閉じ込められてどの位経ったのだろうか

中では未だに静まり返っていた

と言うのも牢屋内では特にやる事が無い上にプログラムの魔王では牢屋を破壊する事が出来ない為こうして立ち往生する羽目になっているのだ

「はぁ・・・退屈だなぁ」

こなたは呟いた

すると、突如後方の壁が音を立てて崩れた

中に居た皆は何だ何だと壁の方を見る

すると其処には壁をブチ破って来たリュウセイ達が居た

「待たせたな皆！助けに来たぜ！」

第8話 無双

ちよつと、どんな入り方してるのよこの男は？

牢屋の壁をブチ破って出てきたリュウセイにかがみは驚愕の顔をする
そりや勿論である

普通牢屋って言ったら牢屋の扉を開けるのが筋である
なのに壁を破壊して出てくるとは正にリュウセイがやりそうだとは思
えたがまさか本当にやるとは思えなかった

「何だよ？折角助けに来てやったのに皆ボカンとした顔しやがって
？もつ少し嬉しそうな顔しろよ」

「あんたねえ、どうせなら普通に助けに来なさいよ！」

「そうか？まあ良いじゃねえか！助かったんだしよお」

ツツコムかがみに対しリュウセイは別に大した顔をしていなかった
いかに自分がした行いを分かっていないかと理解出来る事である
するとリュウセイの後ろから続々と出てきた

「あ、お姉ちゃん！それに皆も居るんだね」

「お！終じゃん、それにチビッコや他の奴等も居るじゃん」

「ええ！つかさ・・・それに日下部達まで居るの？何で？」

かがみは驚愕の顔をしていた

リュウセイとつかさが居るのは納得出来る

だが、何故あの時パソコン室に居なかったひより達が居るのか疑問
でもあった

しかもリュウセイは今背中に長い銃を背負っており腰には一本の刀
が挿してあった

一体何処でそんな装備を手に入れたのか

「ってか、リュウ！それ明らかにゲームに出てこないアイテムじゃん！それを装備できるリュウってはっきり言ってかなりチートじゃん！」

「そうは言ってもよお、（これどう見ても俺の世界の武器なんだよなあ」

（そうだよねえ、背中銃ってブーステッドライフだし、それ獅子王剣だよねえ）

こなたとリュウセイは小声で会話をする

「あのぉ・・・そろそろ此处出ません？」

「そうR！そして私達を此処に閉じ込めたあの青い髪の奴に一边怒りの鉄拳を叩き込むRよ！」

「元凶が何言うか！」

拳を握り締めて叫ぶチュンにかがみがツツコミを入れる

「しかしリュウもこれで無敵になったねえ」

「おう！大船に乗った気でいてくれよ！」

リュウセイは胸を張って笑い出す

一体何処からそんな自信が出てくるのだろうか

「調子に乗ってると何時か痛い目を見るわよ」

「しません・・・」

かがみに突っ込まれてシユンとなるリュウセイ

「まあ、せやけどそのリュウセイならこの牢屋もブチ破れるんとち

やう？」

「おう！任しておけ！こんな鉄格子破壊してやるぜ！」

リュウセイはそう言つて再び拳にオーラを纏う
そしてそれを思い切り鉄格子に叩きつけた
すると鉄格子は音を立ててひしゃげてしまった

「ざつとこんなもんよ！」

「す、凄いですねリュウセイさん！」

「・・・泉さん・・・あれも武闘家のスキルなんですか？」

「そんな訳ないよ！武闘家にあんなスキルは無いよ！」

「前から思つてたけど何であの男だけはあんなチート並のスキルを
持つてるRか？」

チユンは頭に？マークを浮かべて尋ねる

チユンが知らないのも無理はない

と、言うよりリュウセイの真実を詳しく知ってるのは事実状こなた
だけなのだ

牢屋の中で一応話をしたはしたが余り良く分かつて居ないご様子で
ある

「さあ！この調子でガンガン行つてあのイングラムに一発お返しの
鉄拳をお見舞いしてやろうぜ！」

拳を突き上げてリュウセイが言う

何処か嬉しそうだ

そう言えばさつきリュウセイはイングラムに殴られたからかも知れ
ない

だからリュウセイは意気揚々になっているのだろう
そんなこんなでリュウセイを筆頭にこなた達は通路を走っていた

その中ではやはりチート化した兵士がひしめき合っていた
こなた達だけなら苦戦を強いられていた筈だ
だが今このパーティーにはこの男が居る

「おらおらおらあ！」

リュウセイが彼女達の前で兵士達を殴る蹴るして吹き飛ばす
遠くに居る敵にはG・リボルヴァーやブーステッドライフルが火を
噴き

頑強そうな敵には腰に挿してある獅子王剣で一閃する

「うおおお！これが世に聞く『無双』Rかあ！カッコイイR！」
「おんやあ？もしかしてチュンちゃんってリュウに惚れたあ？」

輝く目でリュウセイを見るチュンにこなたは微笑みかけた

「へえ、やるじゃん伊達の奴！あたしらも負けてられないなああや
の！」

「みさちゃん、張り切り過ぎて怪我しちゃ駄目よ」

リュウセイを見て自身も暴れたそうにしているみさおにあやのが言う

「いやあ、やつぱ伊達先輩は良いネタになるツスねえ！何時か裸に
ひん剥いてそれで・・・ムフフ」

「ひよりんが妄想に走ってるデェス！全く節操の無い腐女子デェス
！」

その隣では何やら輝く目でリュウセイを見るひより
そしてそんなひよりにツツコミを入れるパティが居た
その前では未だにリュウセイが暴れまくっていた

「俺は、俺はもつと強い奴に会いに行く！だから其処を退けい雑魚ども！」

「うわぁ、チートで改造された兵士を雑魚呼ばわりしてるよ」

「やっぱあいつ何時か焼き入れないと駄目みたいね」

よもやチート兵士を雑魚呼ばわりするリュウセイにこなたが呆れた顔をしておりかがみが腕をボキボキ鳴らす

そうすると一同は以前訪れたホールに出てきた

「ようやく来たか、リュウセイ・ダテ！」

「イングラム！来てやったぜ！」

ホールの壇上に立っていたイングラムにリュウセイが指を指す

指差されたイングラムはニヤリと微笑んでいた

「その顔・・・どうやら覚醒出来たみたいだな」

「何時までもお前の思い通りになると思うなよ！」

「なら、この俺を倒して見せる！でなければお前達は一生この世界で彷徨う事になるぞ」

「じよ、冗談じゃないわよ！」

「私だつてまだやりたい事とかあるんだよ！」

「私だつてまだやりたい事があるRよお！」

「まだ書いてない同人誌だつてあるツスよお！」

イングラムの言葉に皆が喧々囂々しだす

だが、イングラムは未だに笑っていた

「皆、此処は俺に任せてくれ！」

しかしそれをリュウセイが止める

「リュウ！一人で大丈夫なの？」

「ああ、あいつは俺がこの手で決着をつけないといけないんだよ！」

そう言つてリュウセイはイングラムの前に躍り出る
イングラムもまた臨戦態勢を取る

「さあ来いリュウセイ！お前の力を俺に見せてみる！」

「上等だあ！此処でお前を倒して元の世界に帰つて見せる！」

そう叫びリュウセイが拳を握り締めて駆け上がる
またそれはイングラムも同じであつた
手にオーラを収束させて剣の形にする
オーラ同士が互いにぶつかりあう
激しい火花が辺りを包み込んでいった

第9話 決戦

大広間では二人の青年が互いに激しく火花を散らしていた
言わずと知れたリュウセイとイングラムである

リュウセイは両手に緑色に輝く気のような物を纏って殴りつける
対するイングラムはそれを巧みに捌き、かわしざまに手に同じ色で
かたちどられた剣の様な物を手に持ち振るう

しかしそれをリュウセイは僅差でかわす

顔スレスレにイングラムの放った剣が擦れる

それに触れた前髪数本が切れて舞い上がる

そのまま後ろに飛んでバク転の要領で距離を開ける

それを見たイングラムが大量のガンスレイブを放つ

だが、それを見たリュウセイが両腰に挿してあったG・リボルヴァ
ーを抜き取り正確な射撃で全て射抜く

射抜かれたガンスレイブが小さな爆発を起こして地面に落ちる

そしてまた二人は互いにぶつかり合う

「うおおおおおおおおおおおお！」

「ぶっ」

リュウセイは雄たけびを上げる

だが、それとは対照的にイングラムは背筋の凍るような笑みを浮か
べる

余裕とも取れる表情であった

そんな表情を見てリュウセイ自身苛立ちを感じていた

イングラム、お前は今度は何を企んでる？

リュウセイはそう内心想っていた

かつて、リュウセイは一度イングラムと戦った事がある

イングラムの操るアールガン・リヴァールとリュウセイ達SRXチ

ームの操るSRXの激しい戦いであった

結果は激戦の末SRXが勝利した

そして、イングラムは最後に微笑みながら機体と共に消え去ったのだ
そんなイングラムが今、リュウセイの目の前に居る

しかもこうして戦っているのだ

こうして互いに拳をぶつければそれが本物かどうかはすぐに分かった
今日の前に居るイングラムは間違いなく本物である

では何故再びイングラムが・・・

「余所見している暇があるのか？」

考え込みながら戦っていたせいかリュウセイに一瞬の隙が出来てしまった

その隙をイングラムが見逃す筈も無くリュウセイの腹に蹴りを放つ

「がはっ！」

体がくの字に曲がる

凄まじい威力であった

衝撃の余り胃に不快感を覚える

だが、それをグツと堪えて立ち上がる

目にはうつすらと涙が浮んだが気にしてられない

再び強く拳を握り締めて殴りかかる

だが、その拳には力が籠って居ないらしく今度は片手で掴まれてしまった

「どうした？さっきよりワザの切れが落ちてるぞ？」

そう言っただけで持っていた手をヒラリと返す

するとリュウセイはまるで落ち葉の如く空に舞い上がりそのまま背

中から地面に落ちた

背中を中心に全身に痛みが走る

落下した際の衝撃である

顔が苦痛に歪んでいく

それでもフラフラしながら立ち上がる

そんなリュウセイを不気味な笑みを浮かべながらイングラムが見下ろしていた

「くそお・・・っ、っええ・・・」

「どうしたリュウセイ、まだお前は本気を出してないんじゃないのか？」

イングラムが微笑みながら言う

それに対しリュウセイは歪んだ顔をしていた

口元からは僅かに血が滴り落ちる

リュウセイとイングラムの戦いをこなた達は心配になりながら見ていた

余りに一方的な展開である

リュウセイの攻撃が尽く跳ね返されて逆に敵の攻撃は全てクリーンヒットしている

このままでは幾らリュウセイでも保つ筈が無い

「ちょっと、このままじゃ幾らリュウセイでもヤバイわよ！」

「そうは言いまして私達全員で掛かってる」

「一瞬で全員やられちゃうのがオチだね・・・何せ私達ゲームの能力しか無いし」

流石のこなたもお手上げ状態であつた

「そうツス！チュンちゃんのチート能力ならまともに戦えるんじゃないツスか？」

「残念だけど無理だつたR。あの男はゲームとはかけ離れた存在だったから私の能力は全然効き目無いRよお」

「肝心な時に使い物にならない能力だなあ」

思わずみさおがツツコム

「でもこのままだとリュウセイさんがやられちゃうよ」

「どう・・・すれば？」

「うゝん、魔王のうちでもあれを相手にしてたら3分もたんしな
あ」

流石のラスボスである魔王でさえイングラムを相手にはまともに戦うのさえ無理なのだ

今こうして劣勢とは言え何度もイングラムの攻撃を受けてるリュウセイの強さが改めて凄いと思えた

しかし、このままではなぶり殺しである
どうにかしなければ

「皆さん弱気になつては駄目デエス！こんな時こそ声を出してダテ先輩の氣力をアップさせるのデエス！激励デエス！」

そんな中、一人大声を出して皆に言ったのはパティであった
相変わらず特徴的な喋り方をしているが言ってる事は理に適っている事であった

「た、確かにその通りね」

「うん、私も出来ることならするよ!」

「そうだねえ、それにこんな可愛い女の子達の声援を受ければ誰でも気合入るよねえ」

「あれ?お前可愛い女の子か?どう見ても私には可愛いお子様に見えるってヴァ」

「なんですと!みさきちの癖にい!」

こなたとみさおが互いに睨みあう

そんな二人にかがみの鉄拳制裁が下される

「遊んでんじゃない!」

「みさちゃん、今はダテくんの応援をしてあげよう」

隣に居たあやのもそう言う

それに頭を抑えていた二人は頷く

そして立ち上がり、皆声を出す

「リュウ!負けるなああ!」

「負けたら承知しないからねえ!リュウセイ!」

「リュウ君頑張れえ!」

「負けないで下さいリュウセイさん!」

「リュウセイさんファイトオ!」

「頑張つて・・・下さい・・・」

「ダテエエ!気合入れるお!」

「ファイトよ、ダテくん」

「ダテ先輩！勝って下さいッス！」

「ネバーギブアップ！デェス！ダテさん」

「勝ってR！」

「負けないで！」

「頑張れ！」

『負けるなリュウセイ！』

皆の声が響き渡る

「どうやら見込み違いだったようだなリュウセイ」

「ぐう・・・くそお」

必死に立ち上がろうとする

だが、足に力が入らず膝だけ立っている状態である

今まで受けたダメージが今になって出てきた様である

立てないリュウセイにイングラムはゆっくりと歩み寄る

「今のお前を生かして置いても意味はない・・・ならば、此処でお前を葬る」

そう言ってイングラムの右腕には緑色に輝く剣が現れる

「まあいい、お前が死んだ後、あいつらは俺のサンプルになって貰う」

「そ、そんな事・・・」

拳を握り締めて歯を食い縛る

しかし幾ら力を込めてもそれが足に伝わる事は無く一向に立てないままであつた

そしてそのままイングラムはゆっくりと剣を上に向ける

そして頂点に達した時、それを一気に振り下ろした

その瞬間が、リュウセイにはスローモーションに見えた

（畜生・・・俺は此処でくたばっちゃうのか？あいつ等を元の世界に返さなくちゃならないってのに、こんな所で俺がくたばるのかよ！）

リュウセイは自分の無力さを呪った

だが、その時リュウセイの耳に何かが聞こえてきた

（これは！こなた達の声だ・・・『頑張れ』って言ってるのか？俺に）

リュウセイはふとこなた達を見た

皆声を上げてリュウセイを応援していた

皆必死になってリュウセイに声援を送っているのだ

それを見た時、リュウセイの中の何かが燃え上がってきた

（そうだ、俺はまだ戦える！なのにこんな所で諦められるか！根性見せる俺！）

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおお！！！！」

リュウセイは大声で叫ぶ

そして右腕を硬く握り締めて自身に振り下ろされそうになった剣に当てる

普通ならリュウセイの腕が真つ二つになる筈だが、それとは逆にイングラムの握っていた剣が粉々に砕け散ってしまった

「何！」

「俺は負ける訳にはいかねえんだ！あいつ等を元の世界に返すって約束したんだ！男として約束を守るのは当然だ！だから・・・俺は絶対負ける訳にはいかねえんだよおおおおおおお！」

叫びリュウセイは拳を振り上げる

イングラムはそれを片手で防いだ

だが、威力は先ほど以上に跳ね上がっておりイングラムの腕を払い除けてそのまま直接イングラムに当たる

「ぐっ！」

イングラムが苦痛の顔に歪む

だが、当たる寸前に急所をずらした為か一撃必殺にはならなかったそれでもかなりのダメージにはなったようである

その証拠にイングラムもまた苦痛の顔になっており口から僅かに血が滲み出ていた

（フッ、どうやら力の片鱗を出したみたいだな・・・だが、まだまだ、これでは奴を倒す事は出来ない）

イングラムは内心そう思っていた

リュウセイにはまだ秘められた力がある
しかしそれをリュウセイは上手く発揮出来ていないのだ
それでは「あれ」を倒す事は到底出来ない
ならば無理矢理にでも引き出すしかない
そう思っていた矢先であつた

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』

突如唸るような振動が伝わってきた
それに皆がキョロキョロ辺りを見回す

「な、何だ!」

「しまった!もう嗅ぎつけたのか!」

皆が辺りを見回す中イングラムが舌打ちをした
そしてそれは突如リュウセイの前に現れた

「な、なんだ!」

思わずリュウセイは後ろに下がる
何故なら突如現れたのはかつてリュウセイが元居た世界で倒したあのズフィールドその者であつたのだから

『見ツケタゾ、リュウセイ・ダテ』

「な、喋つた!」

『我ハ才前ヲ倒ス為ニ再ビ蘇ツタ。今度ハ才前一人ダ!コノ手デ叩キノメシテヤル』

「うるせえ!やれるもんならやってみやがれ!」

リュウセイは先手必勝の如くズフィールドに念動拳を放つ

だが、リュウセイの放った念動拳はズフィルードの体に当たると突如オーラが消え去ってしまった

「何！念が消えた？」

『貰ウゾ、貴様ノ念ヲ！』

ズフィルードはそう言ってリュウセイの右腕と首を掴む
すると掴んだ腕からリュウセイの念が吸い取られていった

「ぐわあああああああああああああああああああ！」

リュウセイが悲痛の叫びを上げる
必死に離れようともがく

だが、ズフィルードの力は凄まじくとても外せる物では無かった

「ません！」

イングラムはリュウセイを救おうと再び念を研ぎ澄まして剣を作り
切りかかる

だが、その剣もまたズフィルードに吸い込まれ自身の念もまたズフィルードに吸い込まれそうになった

「ぐうつ！」

咄嗟に後ろに下がり念の流出を防いだ

だが、その間には、リュウセイはダランとなっていた

顔には生気が無くなっており、目を閉じて口が半開きになっていた
ズフィルードは念の無くなり抜け殻となってしまうたリュウセイを
近くに放り投げる

「りゅ、リュウ！」

「嘘！嘘でしょ？」

「そんな・・・やだよおリュウくん」

「リュウセイさん・・・リュウセイさん！」

皆が投げ捨てられたリュウセイの元に集まる

必死に名前を呼んだり、体を揺さぶったり、頬を叩いたりしたが、それでもリュウセイは目覚める事は無かった

今、彼女達の所に居るのは、かつてリュウセイ・ダテと呼ばれた男の抜け殻であり

分かり易く言ってしまうれば骸であった

第10話 決着

暗い・・・

それが第一印象であつた

辺り一面は漆黒の闇。手を伸ばしても何の感触は感じない。まるで宙を浮いているような感覚であつた

ならば此処は宇宙？嫌違ふ。もし宇宙ならば酸素が無い為呼吸は出来ない筈である

しかし今こうして俺は息をしている。では此処は一体何処だ？

朦朧とする意識を自力で回復させて其処に居たリュウセイは起き上がろうとする

だが、何故か理由が分からないが体が思うように動かなかつた。金縛りにでもあつたような感じである

動きたくても動けないと言うもどかしさがリュウセイにはあつた

「あ・・・そうか・・・俺・・・死んだのか・・・」

其処でリュウセイは先ほど何があつたのか思い出した

それは魔王城でかつての教官であり上司でもあつた男、イングラム・プリスケンと激しい一騎打ちをしていた時であつた

突如空間が歪み其処に現れたのはリュウセイが元居た世界で自身が倒した筈の存在、ズフィールドであつた

奴は圧倒的な力でリュウセイをねじ伏せ更にリュウセイの中にあつた念動力を全て吸い尽くしてしまったのだ

つまり、今魔王城に有るのはリュウセイの抜け殻である

だとすれば俺は一体何者なのだろうか？

もしかして肉体が分離して魂だけになり地獄に落ちたと言うののだろうか？

確かにこうも何も無くてはリュウセイにとっては地獄だ

このまま何千年とずっとこうしているのだろうか。そう考えるだけで不安になってきた
冗談では無い。それでは退屈の余り脳がどうかしてしまいそうだし、しかし体は動かない。回りは漆黒の闇。どうする事も出来ない状況であつた

「畜生！どうせならスパロボアニメとかフィギュアとか置いておけよお！・・・あ、喋る事は出来たんだ」

リュウセイはその時発見した
どうやら喋る事は可能らしい。しかしだからと言ってそれが退屈しのぎになるかと言えば全くならない
返って寂しくなるだけであつた

「畜生！何だよこれ？俺が何したんだよ！俺は見た目通りマジメに清く正しく生きてきたつもりだぞお！」

口に出しては言う物の考えてみれば結構な悪い事やってきた気がする

元居た世界では良く同僚のライと喧嘩していたので腹いせに彼の注文したカレーライスに唐辛子丸々一本入れた事もあつた

またライは良く韓国ドラマを見ていたのでこっそり忍び込んでリュウセイの秘蔵のスーパーロボットアニメと摩り替えておいたりもした。しかしそれはその後潰され上から韓国ドラマを入れられてしまい返ってリュウセイが後悔する結果となってしまった

後はライを縛り上げて自身の部屋で24時間スパロボアニメ漬けにした事もあつた

あれは戦闘の際にライにも燃えるロボット魂を植えつける為にと仕込んだ事であつたのだが

後他には集合時間をすっぱかしてアニメに没頭した為に皆にこっぴ

どく叱られた事もあった

それに徹夜でアニメ鑑賞していた為に講習の際に居眠りした為に教官に拳骨食らった事もあった

他には勝手にR-1の機体色を塗ろうとして皆にコテンパンにされたこともあった

「うゝむ・・・考えてみると俺って結構悪い事してたんだなあ」

腕を組んで悩むリュウセイ

だが、其処で気づいた。あれ？体が動くぞ！

そう、さっきまで全く動かなかった体が今は自由に動くのだ

しかし一体何故？再び腕を組んで深く考え込んだ

すると突如リュウセイの目の前が真っ白に輝き出した

余りの眩しさに思わず手で視界を覆う

やがて光が収まり手を退けると、其処にはある光景が映し出されていた

それは、初めてリュウセイがこなた達の世界に来た時の光景であった
初めはこなたもそうじろうの叔父さんも驚いた顔をしていたが、事情を説明すると自分を快く受け入れてくれた

特にこなたとは分野は違えど同じオタク同士なので会話が弾んだ物だ

『ずえったい萌えアニメが良いって！』

『いいや、絶対ロボットアニメが一番だ！』

「・・・まあ、たまに喧嘩もしたなあ」

思わず苦笑いになるリュウセイ

すると場面が変わり今度は学校でこなたの友人であるかがみと話をしている場面であった

『なあかがみ、頼むよ宿題見せてくれないか?』

『はあ、あんたは本当にこなたと同じね、それじゃ将来が心配よ』

『何だ?心配してくれんのか?』

『べ、別にそんなんじゃ無いわよ!』

『お、かがみんツンデレだなあ。いやあロボットアニメでもヒロインは良くツンデレが多いんだよなあ・・・お前は正にツンデレの王道に行く少女なのだあ!』

『何訳の分からん事言っただこの大馬鹿やロウウウウウウ!』
『あべし!』

「・・・アハハ、あの時のかがみの鉄拳は痛かったなあ」

殴られた箇所を摩るリュウセイ

どうやら本心でそう思っているようである

するとまた場面が変わり今度はこなたと同じクラスのみゆきとつかさと話している場面であった

『リュウセイさんは将来の夢とかあるんですか?』

『俺は勿論スーパーロボットのパイロットになる事だぜ!』

『す・・・すーはーろぼと?』

『つかさ違うぜ!スーパーロボット!分かるか?』

『えっと・・・前にお母さんが借りてきたアニメですけど・・・確か「ガンダム」と言うのがそうでしょうか?』

『全然違うぞみゆき!それはリアルロボット!スーパーロボットってのはもっとこう合体して変形したり武器とかも派手でとにかくでかくて技なんかも叫びまくりのとにかく熱い男のロマンの塊のようなロボットなんだよ!』

『え・・・ええと・・・』

『ど・・・どんだけ』

「・・・ああ、あいつ等あの時生返事してたのは全く理解してなかったからだったのな」

苦笑いを浮かべるリュウセイ

そしてまた場面が映る

それはゆたかとみなみと話している場面であつた

『リュウセイさんは良くお姉ちゃんと仲良く話てるのが多いけどどんな話してるの?』

『うん? なぁに何時もの話さ』

『・・・何時もの・・・話?』

『まあ言つちまえばオタク話さ。詳しくは後でこなたにでも聞きなうん、分かつた』

『・・・良かつたね・・・ゆたか』

「・・・あの後こなた一体二人に何話したんだ?」

リュウセイは仕切りに疑問に思つた

そしてまた場面が移り変わった

今度はひよりとパティと話してる場面であつた

『なぁ、何で何時も俺の事付回すんだ?』

『ダテ先輩、黙って私達の夢の生贄になつて欲しいツス!』

『そうデエス! これも夏のコミ・・・』

『パティさん! それは禁句^{タブー}ツスよ!』

『あ、危なかつたデエス!』

『???』

「・・・結局理由教えてくれなかつたなぁ・・・一体何で俺の事つけ回したんだ?」

腕を組んで考え込むリュウセイ

するとまた別の映像が映し出された

それは、先の魔王城の光景であつた

倒れて動かなくなつたリュウセイに涙しながらも必死に呼びかける
ゆたかとかさ

それから守ろうと必死になつてゐるみゆきとかがみ

そして無謀にもズフィールドに挑んでボロボロになつてゐるこなた、

みなみ、みさお、パティ、あやの、ひよりの姿があつた

そして、他にもチュンや魔王、それにイングラムもボロボロになり
ながらも必死にズフィールドと戦つていた

だが、その力は余りにも強く、最早皆ボロボロであつた

その映像を見た時、リュウセイの心は揺らいだ

（俺は・・・このまま此処に居て良いのか？このまま仲間の皆がや
られていくのを黙って見ているしかないのか？）

リュウセイは自身にそう問いかけた

答えは・・・勿論NOである

だとすれば一刻も早く元の世界に戻らねばならない
だが、どうやって

目の前には今にも倒れそうになりながらも必死に戦う皆が居る

なんとしても其処に行きたい。そして皆を助けたい。もう誰かを失
うのは嫌だ

それはかつてリュウセイが経験した事件であつた

それはリュウセイがまだ幼い子供の頃であつた

その時リュウセイは休暇を取っていた父と仲良く手を繋いで町を歩いていた

そんな時、通りかかった銀行で強盗が人質を取り身代金を要求していたのだ

犯人と思われる男の手には一丁の拳銃が握られていた

男は錯乱しており今にも発砲しそうであつた

警官達が必死に説得を試みるも全く聞く耳持たずであつた

「リュウセイ、お前は此处に居ろ！」

「と、父さん！」

父は離そうとしないリュウセイの手を無理矢理放し犯人のところへ向かった

そして、それがリュウセイと父の最期であつた

どうにか父はその後人質を解放したが、その際に錯乱した犯人が父に対し発砲したのだ

警官達がさかさず犯人を取り押さえたので事件は無事に解決したが、銃弾を受けた父は虫の息であつた

「父さん、父さん！」

「りゅ……リュウセイ……人質……人質は……無事か？」

「う、うん……父さんのお陰で無事だったよ……お礼も言つてたし」

「そ……そうか……良かった……」

父の呼吸が徐々に薄くなっていくのがリュウセイにも分かった
リュウセイは必死に父の肩を揺さぶった

そんなリュウセイの腕を父は振るえる手でしっかりと掴む

「い・・・良いか・・・リュウセイ・・・強くなれ・・・強くなつて・・・多くの人を・・・守れる・・・立派な男に・・・なるんだ・・・」

「父さん・・・なるよ！僕、絶対なる！強くなって、友達も、母さんも、皆絶対に守ってみせるよ！」

「それでこそ・・・俺の・・・息・・・こ・・・だ・・・」

父は笑みを浮かべた後、そのままの顔で静かに眠った

リュウセイは再度父に触れた

が、その手から伝わってきたのは徐々に熱の引いていく父の肌であった

「父さん・・・とうさあああああああああああああああああああああああああん！！！」

リュウセイは泣いた。大声で泣いた。喉が張り裂けんばかりに泣いた。目から滝のように涙を流した。三日三晩泣き続けた

だが、その後リュウセイは泣かなかった

父と約束したからだ

強い男になる。強くなって皆を守って見せる

幼いながらもリュウセイは固く誓ったのであった

「・・・親父・・・俺はまだ強くなったのか自分じゃ分かねえよ・・・
・だけど、これだけは言える！俺は・・・絶対にあいつ等を守って
みせる！見てくれ・・・親父！」

リュウセイは硬く拳を握り締めてそう呟いた
そして目の前にある映像の前に立つ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

そして硬く握り締めた拳を思い切り振るい映像に向かってブチ当てる
すると映像は亀裂を生みやがて粉々に砕け散った
そして辺りを真っ白い閃光が包み込んだ

その頃、こなた達は必死にズフィールドと戦っていた
が、戦況は思わしくなく、一方的にズフィールドが押していた

「ドウシタ？脆弱ナ人間ドモ。才前ラノ足掻キハソノ程度ナノカ？」

ズフィルードが笑みを浮かべる

それに対して彼女達はボロボロであった

「てて・・・何あれ？相当なチートの持ち主だよ」

「こっちの攻撃は全く通用しないってのに向こうの攻撃は滅茶苦茶効くなんてすぎるだつてヴぁよぉ」

「こ・・・このままだと私達やばいんじゃ・・・」

皆の顔に不安が過ぎってきた

そのままズフィルードは視線を倒れて動かなくなったリュウセイに向ける

「サテ、後ハ貴様等ノ最後ノ希望トモ言エルソノ男ヲ葬ルダケダ」

ズフィルードはゆっくりとリュウセイの元へ近づく

「ダテ君を傷つけさせないわ」

「此処は私達が死守するデェス！」

「邪魔ダ」

そう言い放ってズフィルードは手を横になぎった

するとまるで突風でも起こったかのように其処に居たこなた達は壁の向こうに吹き飛ばされてしまった

「あつっ、なんちゅうやつちゃ！魔王のうちが手も足もでえへんなんて」

「私でも全く齒が立たないR！メツチャ悔しいRよ」

「くっ・・・リュウセイでも駄目か・・・最早これまでか」

同様に吹き飛ばされた魔王、チュン、イングラムの顔が重く沈みこむ
そしていよいよズフィールドがリュウセイに近づく

動かないリュウセイを守るようにつかさとゆたかが前に立つ
目にはうつすらとだが涙が滲み出ている

恐怖で体が動かない

それでも必死にリュウセイを守ろうとしているのだ

「麗シイ友情ト言ウ奴カ・・・ナラバ纏メテ吹き飛ば」

ズフィールドが手に紫色のオーラを束ね出した

もう駄目だ

誰もがそう思えた

正にその時であつた

「つててて・・・どうやらやっと戻つて来れたみたいだな」

「ナ！キ・・・貴様！」

「りゅ、リュウ君！」

「リュウセイさん！」

「リュウ！」

「リュウセイ！」

「ダテエ！」

「ダテ先輩！」

皆がリュウセイを見た

なんと死んだと思つていたリュウセイが首をコキコキ鳴らしながら
起き上がったのだ

「貴様・・・何故生キテル？」

「おいおい、お約束だろう？スパロボアニメでも主人公は例え殺さ
れても不死鳥の如く蘇つて悪を倒す・・・これ王道だぜ」

リュウセイが余裕たっぷり指を指す
それに全員が啞然とした顔で見ていた

「こ・・・こんな時にアニメネタ・・・」

「又又・・・流石はリュウ、私と双壁を成すだけはあるなあ」

「只の大馬鹿よ、あんたもリュウセイも」

ニヤリとするこなたの横でかがみが大声で言った
それに皆が苦笑いを浮かべる
だが、ズフィールドは不満前回の顔をしていた

「生意気ナ！ナラバモウ一度死ネ！」

ズフィールドはそう言って拳を硬く握り締める
すると手の形が変形して長い剣状になった

「舐めるなよ！剣ならこつちだつてあるぜ！」

リュウセイはそう言うと言の前に両手を翳す
するとその間に眩い光が集まっていき、やがてそれは一振りの剣に
なった

リュウセイはそれを両手で握り締める

「死ネ！リュウセイ・ダテ！」

「くたばるのはお前だ結晶野郎！」

リュウセイとズフィールドの剣がぶつかり合い激しい閃光が舞い散る
余りの閃光に皆は揃って目を瞑る
こなたに至つては「うおっまぶし！」とこれまたアニメネタを呟い

て
い
た
が

そして、目を上げてみると、其処では既に勝負が決していたリウセイの剣がズフィルードの剣を叩き折りそのままズフィルードの胸を貫いていたのだ

「バ……馬鹿ナ……コノ俺ガ……二度二渡リ……負ケル
ダト……」

「これぞ、天上天下念動無双剣・流星切りだあああああああ
あああああああああああ！」

そう叫んでそのままの勢いで流星は真上に剣を振り上げた。それによりズフィールドは真つ二つに裂けてしまった。

「グゴグオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「もう二度と出てくるんじゃないぞ！てめえの相手なんざ二度と
たくなえしよ」

最後に決め台詞とも思える言葉を放ちリュウセイは剣を光に帰した
そんなリュウセイの元に皆が集まっていく

「やっ たなあ ダテエ！」

「無事でよかったわダテ君」

「流石ダテ先輩ツス！」

「これでひよりの夢が近づいたデース！」

「淒いよりユウ君！」

「カッコ良かったですよリュウセイさん」

「
・
・
・
尊敬します」

「ま、まあ無事で良かったわ」

「本当に、あの時はどうしようかとヒヤヒヤしました」

「よ、流石主人公だねえリュウ」

皆がリュウセイに賞賛を送る
それにリュウセイが得意げな顔になる
すると其処へイングラムが歩み寄った

「イングラム」

だが、その顔に以前のような憎しみも敵意もなかった
そしてそのままリュウセイとイングラムは話をした

「リュウセイ。前にも言った通りお前達をこの世界に呼んだのは俺だ」

「ああ、聞いた・・・それがどうしたんだ？」

「目的はあのズフィールドを倒す事だ、そしてそれを果たした・・・
お前なら分かっているはずだ」

「え？どういう事？」

意味がさっぱり分からずかがみ達の頭には？マークが浮ぶ
そんな一同にイングラムはそつと答えた

「リュウセイは・・・元の世界に帰らねばならないと言う事だ」

第11話 別れ

「ど、どう言う事？リュウセイが元の世界に帰るって一体どういう事よ」

信じられないと言った顔でかがみが聞いてきた

当然だ。皆で一緒に帰る

そう約束したのだ

なのにリュウセイは元の世界に帰ると言う突然の言葉は其処に居た一同には衝撃であった

だが、リュウセイは驚いていなかった。むしろ当然と言った顔をしていた

「そうだよな・・・俺は本来この世界に居るべき人間じゃない」

「そ、そんな事無いよ！リュウ君はこの世界に居て良いんだよお！」

つかさが目に涙を浮かべて叫んだ

リュウセイはそんなつかさに笑って見せた

「ねえイングラムさん。どうしてリュウを元の世界に帰すの？」

「あそこの世界ではリュウセイの力が必要だからだ」

こなたの問いにイングラムは率直に答える

「でも、それじゃ私達はお別れになるんですか？」

「そうなるな」

「ヴぁ・・・ど、どうしてもお別れしないといけないのか？」

「寂しいです」

「そんなのやだよ」

皆がリュウセイとの別れを悲しんでいた
皆別れたくないのだ

一年、時間としてはとても短い間ではあったが、その間皆はリュウセイと当たり前のように接してきたのだ
それが突然こうして分かれる事になるなんて

とても信じられなかったのだ
出来る事ならずと一緒に居たい
それが皆の率直な意見であった

だが、イングラムはそんな皆の気持ちを察したのかかぶりを振る

「もしこのままリュウセイがこの世界に留まればあちら側の世界の住人までもが来てしまう。そうなればお前達の世界はリュウセイの世界と同じ争いの起こる世界になってしまう。リュウセイはそんな事はしたくないんだ」

イングラムの言うとおりであった

リュウセイは出来る事なら別れたくない

だが、このまま留まれば彼女達を巻き込んでしまう

異世界で出来た友

それを自分達の世界の巻き添えには出来ないのだ

皆が今にも泣きそうな顔でリュウセイを見る

そんな皆にリュウセイは言った

「皆、約束するよ・・・何時か俺の世界の悪い奴等を全員ぶっ飛ばしたら・・・またこっちに遊びに来る・・・絶対だ!」

リュウセイは拳を握って誓った
それに皆が頷く

「絶対だよ、絶対遊びに来てね！」

「待ってますよ」

「早めに来いよ」

「無理しないでね」

「私も・・・待ってます」

「体には気をつけてね」

「次来た時には是非協力して欲しいッス！」

「次こそ野望の礎になるのデェス！」

「は、早く片付けて来なさいよね」

「次来たらまた一緒にゲームしようね」

皆がリュウセイに言葉を送る

それにリュウセイが「おう！」と指を立てて満面の笑顔で答える
そんなリュウセイの横にイングラムが立つ

「それじゃリュウセイ・・・行くぞ」

「ああ、頼む」

頷くリュウセイ

そんなリュウセイの肩にイングラムは手を置く

そして目を瞑る

するとリュウセイを眩い光が包み込む

どうやら帰る時が来たみたいだ

「それじゃ皆・・・また何時か！」

そう言つてリュウセイはその瞬間その場から姿を消してしまつた
そしてそれから間も無くこなた達の体にも変化が現れた

「うおっ！私達の体も光つてるよ！」

「ふえええ！ど、どうなってるの？」

一同が慌てふためくなかイングラムが口を開く

「心配ない、お前達を元の世界に帰すだけだ」

「そ、そうなんだ」

「良かったね、これで帰れるんだね」

皆がホッと安堵した

そう、これで元の世界に帰れるのだ

だが、やはり何処か寂しい気持ちがある

そう、リュウセイが居ないのだ

もうリュウセイは元の世界に帰っただろうか

少し心配になる一同

しかし大丈夫だろう。何しろあのリュウセイである

根拠の無い自信ではあるがそう思えたのは事実である

「自分等にはホンマ感謝しとるで、あんがとな」

「また遊びに来て下さいね」

「今度は私とパーティー組んでね」

「今度はチート無しで一緒に遊んで欲しいR」

イングラムの横でこの世界で知り合った皆が手を振る

それに答えるように皆も手を振った

そしてその次の瞬間皆が一斉に姿を消したのだ

恐らく転送が成功したのであろう

それにホッとするイングラム

「さて、俺も戻るとするか」

そう言つてイングラムは一人静かに消え去つていくのであつた
こうして、二つの世界で起こつた事件は人知れず解決したのであつた

目を覚ますと其処は見覚えのある部屋であつた
回りには電源のついたパソコン
辺りには自分達が持つてきた荷物が散乱していた
夜のパソコン室。その一言で片付いた
其処で皆は目を覚ました

「皆、起きた？」

こなたが回りを見て口を開いた
それに呼応して続々と皆が起きる

「はあ・・・どうにか戻つてこれたみたいね」
「うん、一時はどうなるかと思つたよお」
「ですが、無事に戻れて何よりでしたね」
「でも・・・やっぱり居ないね」

皆が安堵するなかこなたは回りを見回してリュウセイを探した
だが、やはり其処にリュウセイの姿は無かつた

そう思うと少し寂しく感じたのかあなたは少し俯いてしまった
そんなあなたにかがみがそつと肩に手を置く

「リュウセイが言つてたじゃない。何時か遊びに来るって」

「そうですね。それを信じて待ちましょう」

「えへへ、私今から楽しみになつてきちゃったあ」

「ま、アイツならすぐに来るってヴあ」

「そうね、だつてダテ君だもんね」

「うん、きつとそうだよ」

「私も・・・そう思います」

「私も来てくれないと困るッス」

「私もデエス」

皆が口々にそう言う

それを聞いてあなたの顔も少しだが明るくなった

「そうだよね・・・何時かきつとリュウは来るよね」

あなたはすっかり暗くなつた空を見てそう呟いた
空には一面星が輝いてとても綺麗な星空になっていた
恐らく此处とは違う世界でリュウセイもまた星空を見ているのであ
ろう

そう思うと何故か近くにリュウセイが居る気がした

「何や自分等、まだ居ったんか？早よ帰らんと親が心配するでえ」

そんな一同にたまたま見回りに来た黒井先生が言葉を投げかけた

「あ、黒井先生」

「そうだね、帰ろつお姉ちゃん」

「そうだねえ・・・流石にお父さんも心配してるし」

皆はとりあえず退散する事にした

パソコンの調整は終っており後は電源を落とせば終りなのだし、しかし、其処でふとこなたは黒井先生にある事を聞いた

「そう言えば黒井先生。リュウセイって人知ってます？」

「リュウセイ？誰やそれ？」

「覚えてないんですか？」

「何や？泉の彼氏か？」

こなたの問いに黒井先生はからかうように言う

それにこなたはかぶりを振る

すると皆が一斉に集まってきた

（どう言う事よ）

（どうやら私達以外は皆リュウセイさんの事を忘れてしまったみたいですね）

（何か・・・それって寂しいね）

（でも、変に言い訳を考えるよりは楽なんじゃない？）

（あんたは・・・）

各々がヒソヒソ話しをしていた

それを見て黒井先生が呆れたのかこう一言告げて去って行った

「どうでも良えけどちゃんと戸締りはしっかりせえよ」

ライとアヤは戦場跡を探し回っていた
只ひたすらに探していたのだ
彼らの仲間でありSRXチームのメンバーである男を

「リュウセイ！居たら返事しろ！」
「リュウ！聞こえる？」

ライとアヤが機体のマイクから必死に呼びかける
だが未だに応答が無い
本当なら草の根を分けてでも探したかった
だが、先の戦いのダメージが酷いせいかR-2もR-3も動けない
状況であつたのだ
最早諦めかけたときであつた
突如二人の前に眩い閃光が放たれたかと思うと、その閃光が晴れた
先にはズフィルードに体当たりしたあのR-1が其処に居たのであ
つた

「あれは・・・まさか」
「リュウ！返事をして！リュウ！」

ライが目を大きく見開きアヤが張り裂けんばかりの声で叫ぶ
その声を聞いたのかR-1のコクピットに居たリュウセイは目を覚
ました

「う……う……こ、此処は……」

リュウセイは頭を振って回りを見た

其処は確かにR - 1のコクピットであった

そして、それが意味するのは何かリュウセイには分かった

（俺……帰って来たんだなあ）

ふと、リュウセイは視線を動かした

其処にはボロボロになったR - 2とR - 3が居た

「ライ！アヤ！」

「リュウ、良かった」

「ったく、心配かけさせるなこの大馬鹿野郎」

「はは、悪い悪い」

リュウセイはバツの悪い顔で皆に謝った

そして意気揚々と二人の元へと向かっていく

こうして、リュウセイは帰って来た

元の世界に

元の仲間達の元に

エピソード

「以上、三年生による劇でしたあ」

司会者の言葉が体育館に響き渡った

今日は皆が必死に準備した陵桜学園桜藤際の当日であった

あれからこなた達はひたすら忙しい日々を送った

劇の準備、小道具、練習、台本など目まぐるしい日々ではあったが
どうにか間に合った

そして今、こなた達にとって最後の桜藤際が始まったのであった

「はふう・・・どうにか終わったねえ」

衣装を来たままのこなたがだらけていた

「あんたはだらけすぎよ！これからまだ桜藤際は続くんだから」

同じく衣装を着たままのかがみがこなたに指摘する
それを見て他の皆も笑っていた

「でも大変だったよねえ、準備とか一杯あって、もう私眠くて眠く
て・・・」

つかさが呟きながら大きな欠伸をした
それ程までに時間が無かったのだ
それには皆も納得した

「そうですね・・・皆さんお疲れ様でした」

一同を代表してみゆきがそう言った

「アハハ、でもやっぱりアイツが居ないと何か退屈だよなあ」

「そうね」

「はぁ・・・それには私も激しく同意だわ」

皆の胸中にはそれがあつた

そう、今までこのメンバーの中には一人の少年が居たのだ

皆と一緒に忙しく桜藤際の準備に明け暮れていた少年

何処か単純で前向きでオタクで馬鹿な奴であつたが何処か憎めない奴
しかしその少年は今此処には居なかつた

元の世界に帰つたのだ

元の世界で彼を必要としているから帰る

皆は少し寂しい気持ちになつた

だが、これが今生の別れでは無い

きっと何時かまた会える

そう信じていたのだ

「きっと何時かりュウは来るよ・・・私の勘なんだけどさあ、きつ
とリュウはひょっこりと現れると思うんだよねえ」

「またあんたは見も蓋も無い事を」

こなたの発言に皆が薄笑いを浮かべる

「さ、早く片付けましょう。次のクラスの発表がありますし」

「そだねえ」

みゆきが手を叩いて皆に指示を送る

それを受けて皆が忙しく資材や小道具等を片付けていく
そしてそれとは対照的に次のクラスが準備に入っていた

「さあて、そんじゃ私達は他のクラスの出し物でも見に行きますか」
「はいはい」

こなたの言葉に最早ツツコミ疲れたのかかがみも軽く返す
そうして三年生のメンバーが席に戻ろうとした所へ

「お姉ちゃん」

「お、ゆうちゃん・・・それに皆も」

其処には一年生のゆたか、みなみ、ひより、パティが居た

「凄かったよ、お姉ちゃん達の劇」

「感動・・・しました」

「泉先輩キャラ決まりすぎッス」

「かがみんも萌え萌えだったデェス！」

「ちょ、あんたまで私の事ががみんって言うの？」

後輩にまで定着してしまった事に軽くショックを受けるかがみ
そして他のメンバーも交えて賑やかな会話になった
其処でふと、こなたは体育館の入り口を見た
すると、其処には見覚えのある少年が映った
後ろ姿ではあったが、あの髪型やあの後姿を忘れる筈が無かった
それを見たこなたの目が大きく開かれる

「こなた、どうしたの？」

「かがみん！今あそこにリユウが居たよ！」

「え？それ本当？」

「本当に居たの？こなちゃん」

「すぐに行きましょう！」

そう言つて一同はリュウセイが居たと思われる体育館の入り口に出た
しかし其処にはリュウセイの姿は無く、変わりに一枚の紙が置かれ
ていた

「ん？これつて・・・」

かがみはそれを拾つて中を見る

「これ・・・リュウセイの字よ」

「本当だ！それにあちこちにスパーロボットのイラストが描かれ
てる・・・下手だけど」

何気に酷い事を言うこなたは無視してかがみが紙に書かれた文を見た
其処にはこう書かれていた

『皆元氣そうで安心したぜ』

劇も楽しかった。手伝えなくて悪かったな

今日はほんの少しだけど来れて良かった

本当は顔を見たかったんだけど時間が無いから置手紙しておく
次はまた会おうな

リュウセイ・ダテ

PS・・・こなた、俺が帰つて来るまで「第三次α」の俺のデータ
勝手に進めたり消したりするなよ』

「あいつ・・・全然変わってないわね」

「でも少し安心したなあ」

「ですね、元気そうで何よりです」

「ま、リュウだもんね」

一同が手紙の内容を見て笑みを浮かべる

リュウセイは何時か来る

そんな期待がより一層深まっていた

体育館から離れた場所でリュウセイはこなた達を見ていた
服は何時もの私服ではなくグレーのスーツであった

「へへ、皆俺の書いた置手紙読んでくれたみたいだな」

自分の置いてきた手紙を読んで貰って少し恥ずかしくなったのかリ
ュウセイは鼻を擦った

そんなリュウセイの元に金髪の紺色のスーツを着た青年が近づいた

「良いのか？リュウセイ」

「何がだ？ライ」

「あいつらに何か挨拶しなくても」

「ああ、良い」

ライの言葉にリュウセイはすぐに答えた

「どうせすぐに会えるんだ。その時に会っさ」

「ふふ、リュウらしいわね」

そのすぐ隣に居たアヤが微笑む

今彼女は白のスーツを着ていた

そしてその隣には赤い髪をした少女が居た

「あれが、リュウの別の世界の友達なの？」

「ああ、そうだぜマイ」

マイと呼ばれる少女にリュウセイは答える

彼女もまた桜色のスーツを着ていた

「そっか、今度来た時には絶対私にも教えてね」

「ああ、良いぜ。今度また皆で来ようぜ」

リュウセイはそう言っただけ微笑んだ

そう、彼らは一時的にだがこの世界に来ていたのだ

今日がリュウセイの通っていた学校の祭りの当日だと言っただけ少しの時間だがやってきたのだ

そしてこうして置手紙を置いて今に至るのだ

「それじゃそろそろ帰るとするぞ」

ライは自身のはめていた腕時計の針を見てそう呟いた
それに皆が頷く

（じゃあな皆、また何時か・・・会おうぜ）

リュウセイは最後にこなた達を見てそう思った
何時かまた会う

例えば世界は違ってもまた何時か会える

お互いそう信じあっていた

信じていれば何時かその願いは叶う

そう願いながら

果たして、その後彼らが再び会えたかどうかは此処では語らないで
置く事にする

そう、その続きは是非皆様が考えて貰いたい

何故なら、それもまた物語の一つの結末であるのだから

完

あとがき

どうも、s i b u g a k iです

今回は僕の書いた小説「ラッキースターユニバースOG」を読んで頂誠に有難う御座います

今回はあとがきと言う事なので色々と話させて貰います

まず何故リユウセイ・ダテとらき 　すたをクロスさせたかと言う話からさせてもらいます

ズバリ言いますとリユウセイとらきすたの主人公であるこなたが似ているなあと思ったからこれを書いたのです

後はP S 2のゲーム『らき 　すた 　陵桜学園桜藤際』の中にあるシナリオの一つ『ラッキースターユニバース』を見て閃いた事です

しかしそれで思った事全部書こうとするとそれこそ100部では多分足らなくなる気がしたので此処まで縮めました

その結果話的につじつまが合わない箇所もあるかもしれないと少し心配気味の作者ではありますが

最初予定としては最後にはらきすたメンバーと共に異世界から召還されたライ、アヤとコンビを組んでラスボスに挑むって話しも考えでは居たのですが自分の文才がそれを上手く表現出来ず結局今回のような結果に終わりました

後は出来る事なら故人であるこなたの母や永森やまとや八坂こうも出したかったのですがそれ以上出すとかなりややこしくなる可能性があり控えました

色々と省きや問題を抱えながらもこうして完結にまでこぎつけられたのは一重に読者の皆様の熱い声援のお陰です

本当に有難う御座いました

それで宜しければ僕が書いてる他の小説もご覧になって下さい

それで今度の予定ですが今は自分が書いてる小説に力を入れたいと思います
思っております

特に『スーパーロボット大戦L I N K』は既にラスト辺りが出来上がってはいるのですが間が全然出来て無いという状態の為完結は当分先になると思います

スパロボでは自分のやりたい事を惜しみなくやるつもりですのでそれでは皆様、長くなりましたがまた別の小説でお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0188o/>

ラッキースターユニバースOG

2011年1月12日01時40分発行